

# 弥生時代の青銅器生産地—九州—

後 藤 直

## 序

北部九州では弥生時代の青銅器生産に用いた石製鑄型（外型）多数と中型，取瓶・坩堝，銅片・溶銅片等の鑄造遺物<sup>1)</sup>および鑄造遺構が各地で発見されている。本稿ではこれらの集成・考察（後藤 2000）に引き続き，青銅器の生産地域の変遷を検討する。

鑄造遺構の発見地は青銅器製作地点であり，鑄造作業以外に転用し難い鑄造遺物出土地の多くもまた製作地を示すであろうから，両者は青銅器生産地と変遷を考える上で基本となる。これらによって青銅器生産の地域，時期，継続と断続を判断できるが，発見遺跡は鑄型出土地にくらべはるかに少なく，それだけでは生産地と変遷を考察するには不十分である。

これを補うのが鑄型であり，彫り込まれた型<sup>2)</sup>は種類と型式のほぼすべてを網羅し，出土地ごとに種類，型式，時期の異同が認められ，青銅器生産地域を考える基礎資料となる。しかし多数発見されている鑄型が鑄造遺構や鑄造遺物を十分に補えるわけではない。なぜなら鑄造遺構にとまなうものはほとんどなく，砥石に転用されて（図 2 - 8）本来の使用場所から離れ，なかには大きく流転したらしいものもあり，さらに鑄型の最終廃棄状態から判断される時期は製作の推定時期と大きくずれ中世・近世に及ぶことさえあって，発見地をただちに青銅器生産地とすることはできないからである<sup>3)</sup>。

したがって，鑄型の使用地は鑄型の残存状態や出土地域の状況などから判断せねばならないし，使用時期は出土状況による時期をまったく無視はできないが，彫り込まれた型の種類と型式を基準せねばならない。製品の精緻な型式分類と時期推定（岩永 1980・1986・2000，宮井 1987，吉田 1993・2001）から，鑄型の本来の時期を考えることができるからである。

青銅器生産にかかわる地域区分は，鑄型出土遺跡の粗密，鑄造遺構・鑄造遺物の存否により下記の13地域にわけられる。これらは，鑄型が数枚以上出土する1～複数遺跡と1～2枚が出土する遺跡とが存在する密に分布する地域（ここには鑄造遺構・鑄造遺物も存在する），1～2枚が出土する数遺跡が点在する粗に分布する地域，1～2枚のみ出土する1～2遺跡しか存在しない稀に分布する地域など多様である。密に分布する地域は狭くても一地域として独立させ，粗に分布する地域はやや広い範囲を一地域とし，稀に分布する地域は相当広い地域を一地域とすることもある。

こうして①福岡地域，②春日地域，③唐津地域，④糸島地域，⑤早良地域，⑥粕屋地域（糟屋郡・宗像郡），⑦筑紫地域（春日地域以南，筑後川以北），⑧筑後地域（筑後川以南の福岡県域），⑨遠

賀地域（遠賀郡），⑩筑豊地域（遠賀川と支流域一帯）<sup>4)</sup>，⑪鳥栖地域，⑫佐賀地域，⑬熊本地域に区分する（図1）。

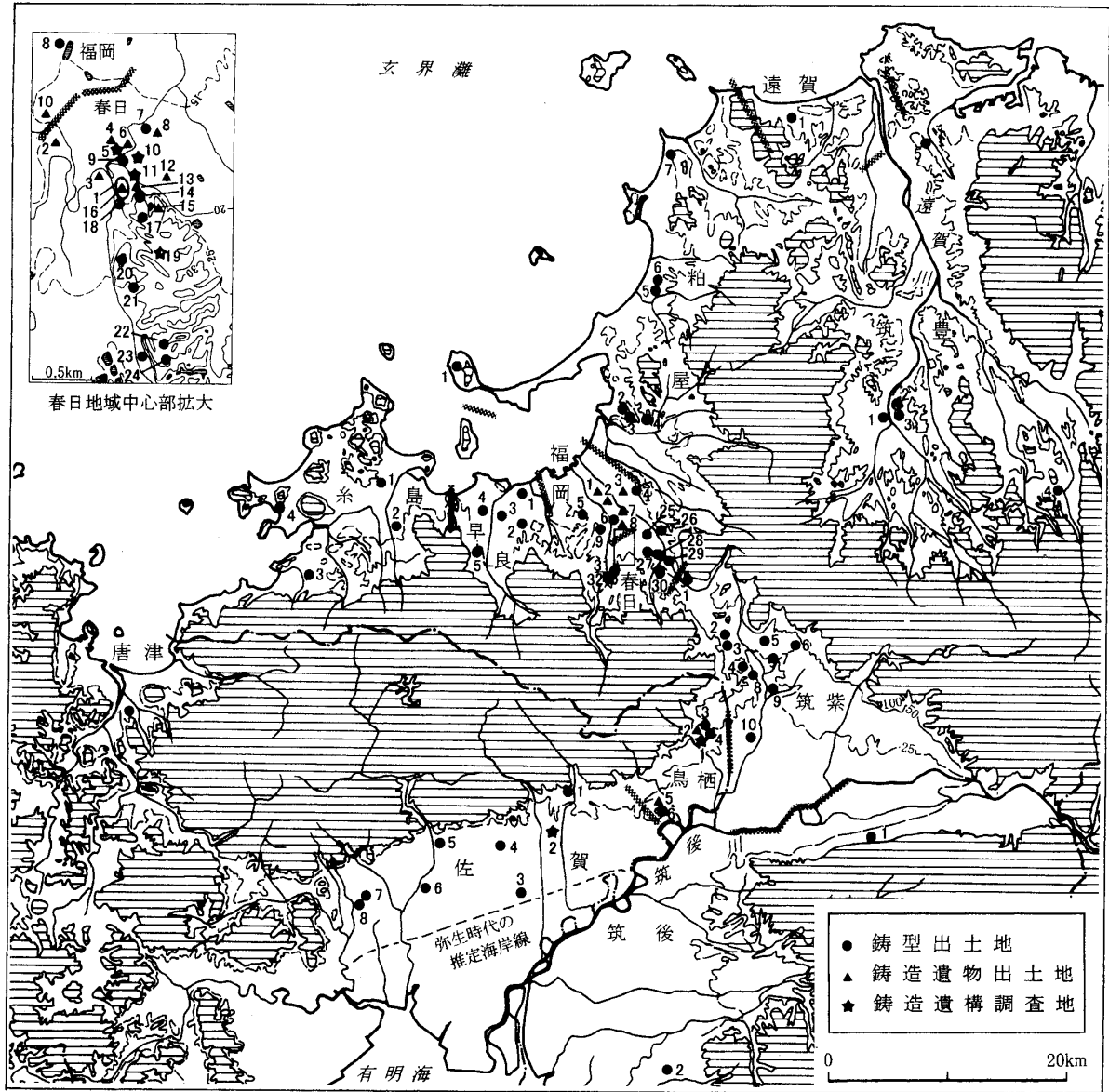


図1 青銅器生産関連遺跡の分布

- 〔福岡地域〕 1 比恵遺跡群, 2 那珂遺跡群, 3 雀居遺跡, 4 赤穂浦遺跡, 5 高宮八幡, 6 五十川, 7 板付遺跡, 8 井尻B遺跡群, 9 大橋E遺跡, 10 笠拔遺跡
  - 〔春日地域〕 1 須玖岡本遺跡, 2 御陵遺跡, 3 タカウタ遺跡, 4 須玖唐梨遺跡, 5 五反田遺跡(第1次), 6 五反田遺跡(第2次), 7 楠町遺跡, 8 黒田遺跡, 9 須玖永田遺跡B地点, 10 須玖永田遺跡A地点, 11 須玖坂本遺跡, 12 須玖尾花町遺跡, 13 須玖岡本遺跡(第5次), 14 須玖岡本遺跡(第11次), 15 須玖盤石遺跡, 16 須玖岡本遺跡(第7次), 17 岡本の上遺跡(第4次), 19 須玖平若遺跡C地点, 20 赤井手遺跡, 21 竹ヶ本遺跡(C地点), 22 大南遺跡, 23 トバセ遺跡, 24 大谷遺跡, 25 仲島遺跡, 26 森園遺跡, 27 駿河遺跡, 28 石勺遺跡, 29 瓦田, 30 九州大学筑紫地区遺跡, 31 中白水遺跡, 32 門田遺跡
  - 〔糸島地域〕 1 元岡, 2 三雲・三雲屋敷田・三雲川端, 3 曲り田遺跡, 4 御床松原遺跡
  - 〔早良地域〕 1 西新町遺跡, 2 飯倉D遺跡, 3 有田遺跡, 4 拾六町平田遺跡, 5 吉武遺跡群(第1次)
  - 〔粕屋地域〕 1 勝馬遺跡, 2 香椎松原, 3 多田羅大牟田, 4 八田, 5 久保長崎遺跡, 6 浜山遺跡, 7 勝浦高原遺跡
  - 〔筑紫地域〕 1 国分尼寺遺跡(7次), 2 永岡遺跡, 3 飯塚南遺跡, 4 隈・西小田遺跡(第6地点), 5 宮ノ上遺跡, 6 ヒルハタ遺跡, 7 小田・中原前, 8 津古東台遺跡, 9 乙隈天道遺跡, 10 大板井遺跡
  - 〔筑後地域〕 1 益生寺寺徳遺跡, 2 上枇杷遺跡
  - 〔遠賀地域〕 1 吉木
  - 〔筑豊地域〕 1 亀ノ甲遺跡, 2 焼ノ正遺跡, 3 下ノ方遺跡, 4 庄原遺跡, 5 松本遺跡
  - 〔鳥栖地域〕 1 安永田遺跡, 2 柚比前田遺跡, 3 柚比本村遺跡, 4 平原遺跡, 5 本行遺跡, 6 江島
  - 〔佐賀地域〕 1 西石動, 2 吉野ヶ里遺跡, 3 姉遺跡, 4 樫ノ木, 5 惣座遺跡, 6 鍋島本村南遺跡, 7 仁俣遺跡, 8 土生遺跡
- この他に熊本市白藤遺跡

これは考古地理的な区分ではあるが、鑄型出土遺跡の粗密や製品の分布状況を比較するなどのために一部便宜的な部分もある。たとえば鳥栖地域は佐賀地域と筑紫地域の連結部にあつてふつうは佐賀地域に含むが、密に分布する地域として独立させる。遠賀地域は福岡・粕屋地域との地理的つながりから稀に分布する地域として分離する。筑豊地域は粗に分布する広い地域として一地域とする。福岡地域と春日地域はあわせて福岡平野地域とするのが通例であるが、検討の必要上それぞれを密に分布する地域として福岡市と春日市の境をもって分離する。

## 1. 青銅器の時期

鑄型の使用時期（鑄造にもちいた時期）は出土状況だけでは判断できないことも多いので、製品の時期を参考にする必要はある。青銅器<sup>5)</sup>各種・各型式の時期を、時期が判明あるいはおおよそ推定できる事例から判断すると次のようになる<sup>6)</sup>。あわせ鑄型の最終廃棄・遺棄時期も付記する。

### 1) 銅剣

細形製品は前期末から中期前半に盛行し、中期中頃以降は相当減少し、後期例は九州島と対馬に少しある。対馬例は朝鮮半島からの移入かもしれない。鑄型の時期は中期前半、中期後半～後期中頃、後期各1例以外は中期中頃～後半である。

深樋式は後期前半～中頃であろう。鑄型は後期の1枚がある（須玖坂本遺跡5次）。多樋式は平壤付近からもたらされた中期後半の1例（須玖岡本遺跡D地点）だけである。

中細形のうち型式的にa類に遅れるb類は中期前半～後半で、a類は中期後半3例と後期前半とみられる2例だが、上限は中期前半にさかのぼるだろう（岩永2000）。鳥根に大量に、中国・四国に少数出土するc類は山陰地方の産物で、九州唯一の対馬木坂遺跡例（後期前半）以外は時期が判明しない。おそらく中期後半～末であろう。中細形の鑄型の時期は中期初頭～中頃、中期前半、中期末でいずれもa類である。

#### 遺跡の文献

- 〔福岡地域〕 1 福岡市教委(1992a・1994・1996a・1996b・1997c), 2 那珂八幡古墳調査団(1978)・福岡市教委(1987a・1992b・1993a), 3 福岡市教委(1995・2000a), 4 力武(1982), 5 後藤・力武(1990), 6 福岡市教委(1987c), 7 福岡市教委(1975, 1981), 8 福岡市教委(1997b・2000b), 9 福岡市教委(1990), 10 未報告
- 〔春日地域〕 1 八木(1908)・高橋(1925)・中山(1927・1929)・島田(1930)・森本(1932)・京都大学文学部(1960), 2・8・19・27 春日市史編纂委員会(1995), 4 春日市教委(1988), 5 春日市教委(1994a), 6 春日市教委(1995b), 7 春日市教委(1996), 10 春日市教委(1987・1998), 11 春日市教委(1993・1994b), 12 春日市教委(1993), 13・16 春日市教委(1995a), 15 春日市教委(2001), 17 春日市教委(1980b), 20 春日市教委(1980a), 22 春日市教委(1976), 23 春日市教委(1996), 24 春日市教委(1979), 25 大野城市教委(1983), 26 大野城市教委(1988), 28 大野城市教委(1996), 29 徳本(1999), 30 九州大学春日地区調査室(1994), 32 福岡県教委(1979), 3・9・14・18・21・31 未報告
- 〔唐津地域〕 1 佐賀県教委(1980)
- 〔糸島地域〕 1 未報告, 2 高橋(1925)・福岡県教委(1995), 3 二丈町教委(1994), 4 志摩町教委(1983)
- 〔早良地域〕 1 福岡市教委(1982), 2 中村・池田(1995), 3 福岡市教委(1986・1987b・1988・1997a), 4 福岡市教委(1993b), 5 未報告
- 〔粕屋地域〕 1 森・乙益・渡辺(1958), 2 森(1963), 3 福岡県教委(1995), 4 下條(1977・1989)・後藤(1982)・常松(1998), 5 福岡県教委(1973), 6 福岡県教委(1982), 7 未報告
- 〔筑紫地域〕 1 太宰府市教委(1991), 2 山野(1979), 3 福岡県教委(1995), 4 筑紫野市教委(1993), 5 夜須町教委(1999), 6 佐藤(1991), 7 松本(1966), 8 小郡市教委(1993), 9 福岡県教委(1989), 10 小郡市教委(1990)
- 〔筑後地域〕 1 江島(1999), 2 福岡県教委(1988)
- 〔遠賀地域〕 1 高橋(1925)
- 〔筑豊地域〕 1 森(1942), 2 岡崎(1940), 3 森(1942)・飯塚市教委(1982), 4 添田町教委(1994), 5 北九州市教育文化事業団(1998)
- 〔鳥栖地域〕 1 鳥栖市教委(1985), 2 鳥栖市教委(1984), 3 未報告, 4 佐賀県教委(1993), 5 向田(1993), 6 未報告
- 〔佐賀地域〕 1 岡崎(1940), 2 佐賀県教委(1994), 3 千代田町教委(1985), 4 文化財保護委員会(1959), 5 大和町教委(1986), 6 佐賀市教委(1991), 7・8 未報告
- 〔熊本地域〕 熊本市白藤遺跡(林田・原田(1998))

中広形は時期不明の製品 1 本しかなく、鑄型 1 枚（八田）も共伴する中細形 c 類戈鑄型から中期末頃であろう。

## 2) 銅矛

細形 I 式は前期末から中期初頭、II 式 a 類は前期末から中期中頃で須玖岡本 D 地点例が中期後半に降る<sup>7)</sup>。鑄型の時期は I 式が中期前半、中期前半？、中期？、細別型式不明が中期前半と中期中頃～後半である。

中細形は a 類に中期後半～末 8 例、b 類に中期後半 1 例、c 類に中期中頃～後半？ 1 例がある。確証はないが上限は a 類が中期前半に、b 類・c 類が中期中頃に上がり、下限はいずれも中期末より以前であろう。鑄型の時期は a 類が中期中頃～後期後半、b 類が中期中頃～後期初頭、c 類が中期後半で、細別型式不明は中期中頃～後期末に散らばる。

中広形からはすべてが埋納されるため時期判別は難しい。中広形 b 類には後期はじめ例（高知県田村遺跡群（高知県埋文センター 2000））と後期例（佐賀県本行遺跡（向田 1996））が、d 類には後期後半 1 例（対馬）が、細別不明品には後期初頭と前半例があり、鑄型は a ないし b 類に中期中頃～後期末、b 類に中期後半・末、c ないし d 類に中期後半～後期末例がある。これらから中広形 a 類は中期後半～末に出現し、b 類も中期末にはすでに出現し、c・d 類は後期始め頃には出現していたとみられる。中広形の下限は後期前半頃であろう。

広形は b 類に後期中頃～後半例（北九州市重留遺跡（北九州市教育文化事業団 1999））があり、対馬には a・b 類の後期前半～後半例があり、鑄型は後期～古墳時代始めて中期にさかのぼるものはないから、後期の所産である。

## 3) 銅戈

細形には朝鮮半島製品とみてまず誤りない II 式 a 1 類（吉武高木型、吉武高木 3 号木棺墓）、II 式 b 1 類（吉武大石 1 号木棺墓・70 号甕棺墓）とおそらく I 式 a 1 類（鹿部型、束ヶ浦 2 号甕棺墓）があり、いずれも中期初頭であるが、上限は前期末に上がるだろう。

弥生製か朝鮮半島製か議論のある II 式 a 類は、2 類（有田型）が前期末～中期初頭、3 類（汲田型）が中期初頭～前半で、前期末～中期前半に収まる。

北部九州製とみてよい細形のうち、I 式 a 2 類（釈迦寺型と仮称）は前期末、II 式 b 1 類（安永田型）は時期不明、中細形の祖型となる II 式 b 2 類（水城型）は中期前半と後半例がある。II 式 b 類は中期前半に出現し後半まで用いたであろう。鑄型は II 式 b 類とみられる 2 枚が中期前半と後期である（忽座遺跡、平原遺跡）。

中細形は a 類が中期前半を上限とし（鎌田原 6 号木棺墓・8 号甕棺墓）、下限は中頃であろう。b 類には中期後半～末例があり上限は中期中頃に上ろう。c 類には中期後半～末例があり、上限は中頃に多少入るかもしれず下限は遅くとも中期末だろう。鑄型の時期は a? 類が中期中頃～後期

初頭, a ないし b 類と b 類が中期後半と末, b ないし c 類が中期末, c 類が中期中頃～後期中頃と後期前半である。

中広形には後期前半以後 1 例, 後期前半～中頃? 1 例がある。上限は中期後半～末, 下限は後期前半と推測する。鑄型の時期は中期末～後期である。

広形は b 類製品の後期例 (日永遺跡<sup>8)</sup>) と後期例しかない鑄型から, 後期の所産である。

#### 4) その他

武器以外で鑄型が発見されている青銅器の時期は, 鈍が前期末～中期前半に限定される。小銅鐸は中期前半例以外は中期後半～後期例であるが, その間の時期にも存在したと思われる (後藤 1986a)。外縁付鈕式横帯文銅鐸は中期後半～後期初頭, 銅鏃が後期で一部中期に上がり, 銅釧が中期末～後期, 巴形銅器と小形仿製鏡は後期, 筒形品<sup>9)</sup>は後期後半である。鑄型が未発見で中型 (図 2-1) のみみつまっている鋤先は後期で, 一部中期後半に上る (柳田 1980)。

このように推定できる製品の時期幅のなかに, 鑄型の使用時期がおさまることはいうまでもない。

## 2. 鑄造遺構と鑄造遺物による青銅器生産地と時期 (表 1)

鑄造遺構と鑄造遺物が出土し青銅器鑄造を行ったことが確実な地域は, 福岡地域, 春日地域, 鳥栖地域, 佐賀地域の 4 地域である。ただし遺構・遺物の時期は青銅器生産, 使用の全期間にわたるものではない。この 4 地域の鑄造関係遺物・遺構とそれによる鑄造時期は以下のようなものである。

### 1) 福岡地域

鑄造関係遺物のみが出土し, 鑄造遺構は発見されていない。

那珂遺跡群第 8 次調査の矛の中型は中期後半～末の住居址で, 取瓶のうち 2 点は中期末の住居址で, 1 点は中期後半の住居址を切る溝 (時期不明) で出土し, 第 23 次調査では鋤先ともみられる中型が中期末の掘立柱建物の柱穴で出土した。第 8・20・23 次調査で鑄型 (中細形 b 類・b ないし c 類・中広形戈など) が出土した遺構の時期は中期後半～後期前半である。鑄造遺物は鑄造遺構に伴うものではないが, 遺跡群内で中期後半から後期前半の間に青銅器を製作していたことが確かである。

比恵遺跡群第 40 次調査では取瓶片 6 点 (同一個体か) が, 中期末に掘削し後期末に完全に埋没した溝の埋土上層から出土した。第 30・42・43・50・57 次調査出土で出土した鑄型 (中細形 a? 類剣, 中細形 a ないし b 類・b ないし c 類・c ないし中広形戈, 中広形 b 類・広形 b 類矛, 砥石転用品が多い) の出土遺構の時期は古墳時代以降を除くと, 中期後半～中期末前後である。取瓶は後期の青銅器製作の証拠となり, 鑄型は中期末～後期の青銅器生産を示す。

板付遺跡では矛中型と見られる小片 1 点と広形矛鑄型片 2 枚 (1 枚は砥石転用) が後期土器を含む二次堆積層で出土したが, 青銅器を製作した根拠は弱い。

後 藤 直

表 1 鑄造遺物

遺 跡 (*は鑄型が出土していない)		中 型		送風管	取瓶・埴塙		土製品	銅滓など	文 献
		矛	その他		取瓶	埴塙			
福岡市 博多区	那珂遺跡(8次)	1			3				福岡市教委(1987a)
	(23次)		鋤先状 1						福岡市教委(1992b)
	比恵遺跡(40次)				6				福岡市教委(1994)
	板付遺跡(6次)	1							福岡市教委(1975)
	雀居遺跡(4次)			1					福岡市教委(1995)
	井尻 B 遺跡(17次)					取瓶・埴塙 ○			未報告
福岡市 南区	*筭抜遺跡	10						銅矛極小片 (鑄損じ?)	未報告
福岡県 春日市	須玖永田遺跡 (1次)	11	鋤先 1	2	11			銅滓 17	春日市教委(1987)
	A 地点 (3次)	1							春日市資料
	(4次)	○					○	銅滓 1	春日市教委(1998)
	須玖盤石遺跡	11							春日市教委(2001)
	須玖唐梨遺跡(1次)	11						銅滓 若干	春日市教委(1988)
	五反田遺跡(1次)	8			1				春日市教委(1994a)
	(2次)	1							春日市教委(1995b)
	須玖坂本遺跡 (1次)	144	鋤先? 7			取瓶・埴塙 41		銅滓 62	春日市史編纂委(1995)
	(2次)	10							〃
	(3次)	99	鋤先? 1 小銅鐸 2					銅滓 22	〃
	(5次)	86		1		取瓶・埴塙 36		銅滓 7	春日市教委(1993)
	(6次)	12		1	1	1		銅滓 1	春日市教委(1995c)
	須玖岡本遺跡 (5次)	24	小銅鐸? 1			取瓶・埴塙? 7		青銅片 1	春日市教委(1995a)
	(7次)	○				取瓶・埴塙? ○			〃
	黒田遺跡	>40						銅滓 >10	春日市史編纂委(1995)
	御領遺跡	○					○		〃
	須玖尾花町遺跡(1次)	14		1		取瓶・埴塙 27		銅滓 2	春日市教委(1993)
	(2次)	6					1		春日市教委(1995c)
*タカウタ遺跡	5							春日市資料	
平若遺跡 C 地点(1次)							浴銅塊	春日市史編纂委(1995)	
佐賀県 鳥栖市	安永田遺跡			1					鳥栖市教委(1985)
	柚比前田遺跡			1					鳥栖市教委(1984)
	本行遺跡	○		○					向田(1993)
佐賀県 神崎町	吉野ヶ里遺跡	1		2	1	炉壁片? >2	青銅片、銅滓、錫片 1	佐賀県教委(1994)	

井尻 B 遺跡群では最近の第17次調査の後期包含層で大形の取瓶・埴埴類が出土し<sup>10)</sup>、第6・11・14・17次調査の鋳型（中広形 b 類矛、広形 a 類戈、広形矛ないし戈、小形仿製鏡、鏃）の出土遺構・包含層は中期・後期中頃～後半・中期～古代で、中期後半～後期の青銅器製作が確実である。

雀居遺跡第4次調査では送風管が後期後半の層で出土し、この頃の青銅器製作は確かである<sup>11)</sup>。以上の例から、福岡地域では中期後半～後期には青銅器製作を行っていたことが認められる。

なお、最近笠拔遺跡では銅矛中型と鋳損じかともみられる銅矛小片が後期の自然流路から出土したが、これは近くの春日市御陵遺跡からの流れ込みとみられる<sup>12)</sup>。

## 2) 春日地域

鋳造遺物が11遺跡で出土している。このうち10遺跡で膨大な量の矛の中型が、また3遺跡で小銅鐸と鋤先の中型が出土し、ほかに送風管が3遺跡で、取瓶・埴埴が6遺跡で出土し、銅滓が5遺跡で、青銅片や溶銅塊が2遺跡で出土している（図2-1～3・5～7）。また鋳造作業直後に廃棄したとみられる砥石にもできないような鋳型小片（ほとんどは種別・型式不明）が30片以上出ている（図2-9～11）

須玖永田遺跡 A 地点第1次調査では、溝で囲まれた掘立柱建物の鋳造工房址と付近の溝、掘立柱建物柱穴、ピットから、鋤先の中型、送風管、取瓶、銅滓とともに小形仿製鏡、中細形・広形矛などの鋳型が出土し、さらに3次調査で矛中型、4次調査で矛中型と埴埴が出土し、ここで後期後半～末には鋳造を行ったことが明らかになった。

須玖坂本遺跡でも溝で囲まれた鋳造工房を調査し、大量の中型、取瓶・埴埴、銅滓のほか多くの細形～中広形とみられる武器、小形仿製鏡、小銅鐸の鋳型が出土した。詳細は未報告だが、出土土器は中期前半から後期末まで（主体は後期という）で、後期を主に一部中期にも青銅器鋳造を行ったことが確かである。

平若遺跡 C 地点第1次調査の中期中頃～後期の集落からは溶銅塊が出土したが詳しいことはわからない。この遺跡では第2次調査も含め6枚の鋳型（種類・型式が判明するのは中細形と中細ないし中広形戈）が出土し、中細形戈鋳型1枚は中期後半の工房の疑いのある2次調査2号住居址出土である。遅くとも中期後半以降この遺跡では青銅器製作が行われたであろう。

ガラス工房が発見された五反田遺跡第1次調査では矛中型と武器鋳型片が出土し、後期後半の青銅器製作が認められる。

このほかに鋳造遺構はみつからないが鋳造遺物が出土する遺跡がある。そのなかで最も古いのは須玖岡本遺跡第7次調査の墳丘墓内から中期中頃以前の土器とともに出土した矛中型（取瓶・埴埴？もあるようだ）と、タカウタ遺跡の矛中型（中期中頃以前と推定）である。両遺跡とも鋳型は出土していないが、春日地域の青銅器鋳造が中期中頃以前にさかのぼる証拠となろう。

岡本盤石遺跡では中細形らしい矛中型と5枚の鋳型（多くは中細形矛と戈）が中期中頃～後期はじめの住居址などで出土し、本遺跡ないし近隣での中期中頃～後半の鋳造作業が推定できる。

須玖尾花町遺跡第1次調査では、調査範囲外からの流入とみられる矛中型、送風管、取瓶・坩堝、銅滓および13枚の鋳型（中細形矛をふくむ）が、住居址・土塁内・溝・土塁下溝などで出土した。住居址は中期末～後期前半、溝と土塁は後期前半～末で、遅くとも中期末ないし後半に付近で青銅器鋳造が行われた証拠となろう。

黒田遺跡では矛中型と銅滓が主として1号溝（土器の大部分は後期後半～末）で出土し、種別不明鋳型1枚も同時期の包含層で出土し、ほぼこの時期の鋳造に用いたものであろう。

須玖唐梨遺跡第1次調査の矛中型と銅滓は掘立柱建物、ピット、包含層等からの出土で、遺構はおおむね後期という。また2点の鋳型小片は後期後半～末である。

御陵遺跡では矛中型と坩堝と鋳型（中広形矛ないし中細形戈、鏃）が出ているが、出土遺構は古墳時代初頭前後といい、使用時期と廃棄時期の間にかかなりの時間差が認められる。

以上から春日地域の青銅器鋳造は遅くとも中期中頃から後期後半まで継続したことが確かである。

### 3) 鳥栖地域

矛の中型が1遺跡で、送風管が3遺跡で出土した。

安永田遺跡では掘立柱建物内の青銅溶解炉と考えられる炉跡状遺構が確認され、17号住居址の焼土・炭化物が充満した土坑で送風管が出土した（中期末）。なお21号住居址出土の朱状泥土の主成分は錫の化合物であったが、青銅器製作との関係は明らかでない。ほかに中期末の遺構から横帯文を彫った外縁付鈕1式銅鐸と中広形矛の鋳型が出土した。中期末に青銅器製作を行っている。

この遺跡北側の柚比前田遺跡出土の送風管は、共伴土器からは中期中頃以前と推定されるという。本行遺跡（中期中頃～後期、住居址は中期の方が多）では矛中型と送風管のほかに12枚の鋳型（細形剣・矛、中細形剣、中細形a類矛、横帯文銅鐸など）も出土した。型の型式からは中期前半～中頃の鋳造が考えられるが、出土遺構・包含層の時期は中期中頃～後半のほかは後期や近代あるいは不明で、使用時期と廃棄時期に差があり、鋳造遺構が削平されて失われていないのであれば、鋳型・鋳造遺物は隣接地からの流入とも考えられる。

以上から、鳥栖地域での確実な青銅器生産時期は中期末であり、鋳型の型式や送風管からは中期中頃以前の可能性も高い。

### 4) 佐賀地域

吉野ヶ里遺跡では工房とみられる中期前半の土坑（SK04）の一部が調査され、矛中型、送風管（図2-4）のほかに坩堝、銅滓、青銅片、錫片、炉壁片が出土し、鋳造遺構・遺物からは最も早く製作を行った遺跡である。これとは別に巴形銅器鋳型も出土していて、後期にも生産を行っていたらしいが、中期前半から生産が継続していた確証はない。

なお、筑豊地域の小銅鐸鋳型が出土した北九州市松本遺跡では2号井戸（前期末～中期初頭）か



ら炉壁ともみられる焼土小塊が出土しているが、鑄造施設にかかわるか否かは明らかでない。

このように、鑄造遺物と鑄造遺構から青銅器生産の地域と時期を限定すると、春日地域は中期中頃から後期後半に、福岡地域は中期後半から後期後半に、鳥栖地域は中期中頃以前から末までに、

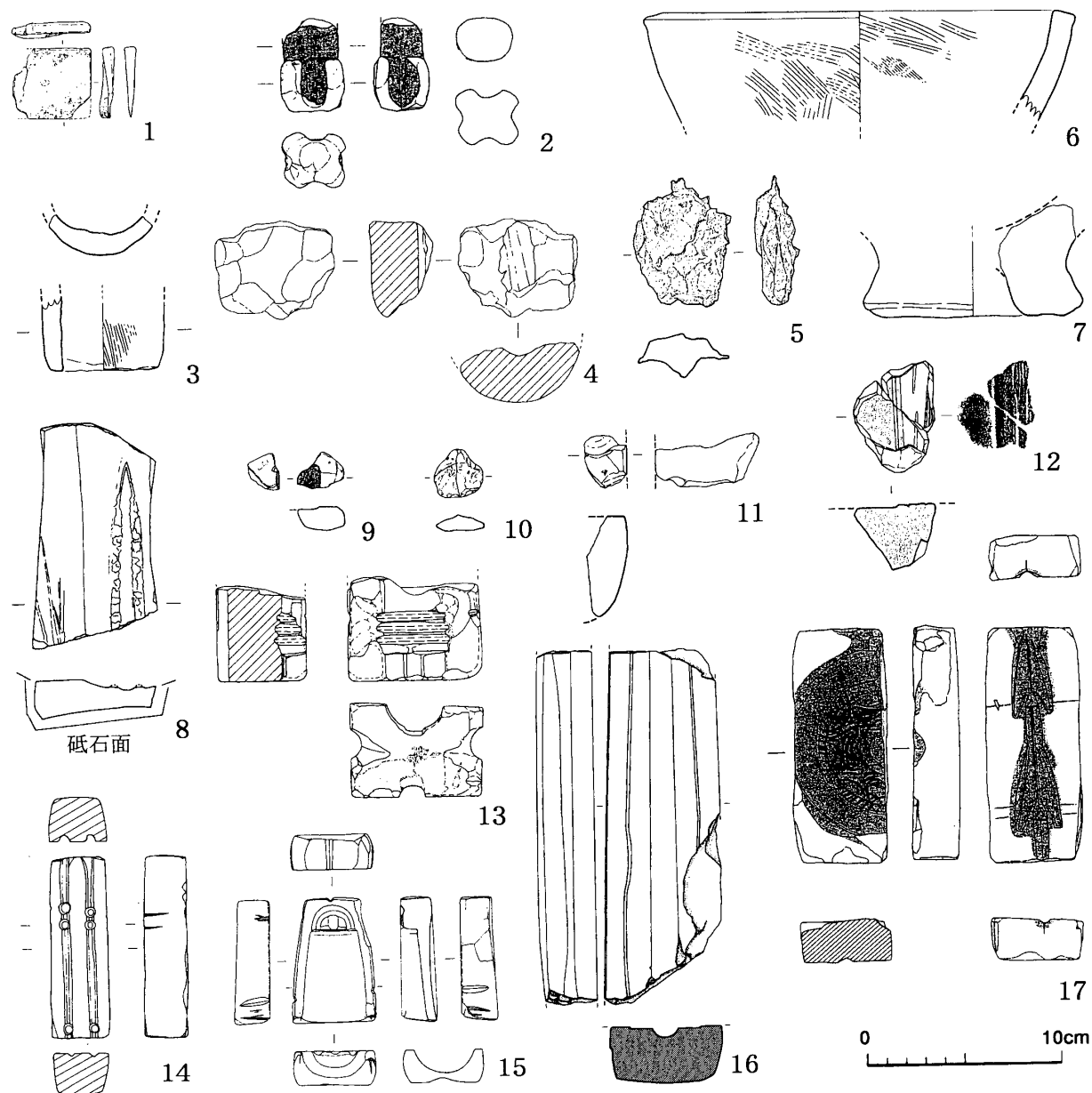


図2 鑄造関係遺物

1 鋤先中型, 2 矛中型, 3・4 送風管, 5 銅滓, 6・7 取瓶, 8 中細形b類鑄型片(砥石に転用), 9 武器鑄型細片, 10 種別不明鑄型細片, 11 種別不明鑄型片, 12 武器鑄型片, 13 細形I式矛鑄型片, 14 瘤付棒状品鑄型, 15 小銅鐸鑄型, 16 細形銅劍鑄型片, 17 小形倣製鏡・鍔両面鑄型

[1・3・5～7・11 須玖永田A地点(春日市教委1987), 2 須玖岡本遺跡第5次(1995a), 4・13 吉野ヶ里遺跡(佐賀県教委1994), 8 焼ノ正遺跡(児島・藤田1973), 9・10 須玖盤石遺跡(春日市教委2001), 12 有田遺跡第3次(福岡市教委1987a), 14 本行遺跡(向田1993), 15 岡本遺跡(春日市教委1980b), 16 勝馬遺跡(福岡市教委1987c), 17 井尻B遺跡群第6次(福岡市教委1997b)]

佐賀地域では中期前半に青銅器生産を行っていたことが確実である。しかもこれらの地域での鋳型出土量はほかの地域を凌駕し、また鋳型や鋳造遺物出土遺跡と周辺遺跡の実態、弥生社会での地域の特質などを総合すれば、長期間にわたる青銅器生産は否定できず、これら4地域は青銅器生産の「核地域」ということができる。

そのほかの地域は鋳造遺構・遺物がみつかっておらず、鋳型も少なく、青銅器鋳造を行った確かな証拠はないが、鋳造をしなかったと断じてよいかは検討を要する。鋳型の残存状態、出土状況、型の種類・型式と製品の分布状況等から製作の有無を判断する必要があるが、生産したとしても生産期間は核地域より短く、生産量も少なかったであろう。

これらの地域は、核地域に隣接し鋳型が出土する唐津、糸島、早良、粕屋、筑紫、遠賀、筑豊の各地域を「隣接地域」に、その外側の鋳型がごく少量出土する筑後、熊本地域を「外縁地域」に区分できる。さらに鋳型が出土しない地域のうち豊前・豊後地域を外縁地域にくわえ、北部九州製品が出土する海を越えた対馬、壱岐、中国、四国地域を「遠隔地域」としておこう。

### 3. 鋳型の種類・型式と青銅器の製作

つぎに鋳型出土地域すべてについて、鋳型に彫り込まれた製品の種類と型式から青銅器製作の有無と製作時期を検討する。まず銅武器（剣・矛・戈）鋳型の型式ごとに、ついでそのほかの種類について見る（表2）。

#### 1) 武器鋳型

##### (1) 細形

細形銅武器鋳型は剣が25個、矛が7個（Ⅰ式、Ⅱ式a類、細別不明）、戈が3個（Ⅱ式b類、細別不明）で<sup>13)</sup>、剣が多く製品量の差を反映している。出土地域は福岡、春日、粕屋、飯塚、鳥栖、佐賀、熊本の7地域である。また早良地域では細形ないし中細形剣型（西新町鋳型A面）が出土している。

前節の鋳造遺物と鋳造遺構の検討から、青銅器生産が中期中頃以前から中期末の鳥栖地域と中期前半に上がる佐賀地域では、細形銅武器の型がそれぞれ9個、13個出土し、剣・矛・戈すべてを含むが、遅くとも中期中頃の春日地域と中期後半の福岡地域の細形銅武器鋳型は剣だけがそれぞれ9個と2個である。両地域に矛と戈が出ていないが、未発見であろうか<sup>14)</sup>。

細形の製作時期の上限は、今のところ中期前半と考えられるが、この時期に使用した確実な細形鋳型はきわめて少ない<sup>15)</sup>。したがって出土状況による時期がそれ以降となる細形鋳型の実際の使用時期が問題となるが、この点については鋳型の石材が参考になる。

春日地域と鳥栖地域の細形銅武器の鋳型には、石英長石斑岩類を材料とするのが通例の北部九州では異例の滑石片岩ないし滑石岩製品がある（唐木田 1993・1997）。春日地域では大谷遺跡の剣の両面鋳型と片面鋳型各1枚、剣？と中細形a類矛の両面鋳型、小銅鐸鋳型、岡本遺跡の小銅鐸鋳型



(図2-15) 1枚の計5枚、鳥栖地域では本行遺跡の剣両面鑄型と瘤付き棒状品鑄型(図2-14)の2枚である。もっとも早く製作を始めた細形武器と中期前半には製作し始めた中細形a類矛に限られ、石材が朝鮮半島の鑄型石材に類似することから、鑄型の廃棄時期をはるかにさかのぼり、青銅器生産開始当初の鑄型とみることができる。このほか土生遺跡(佐賀地域)の鈍鑄型が角閃石岩、本行遺跡の中細形a類矛鑄型がアクチノ閃石岩、松本遺跡(筑豊地域)の小銅鐸鑄型が砂質凝灰岩であることも、鑄型に適する石材が石英長石斑岩に固定する生産開始期の試行を示している。

鑄型の石材からは、もっとも早く青銅器製作を始めたのは春日地域と鳥栖地域と認められ(筑豊地域も可能性はある)、その時期は鑄造遺構・遺物から推定される時期をさかのぼり、中期前半あるいは初頭としてよい。ただし鑄型が生産地点から遊離している可能性が高いため初期の生産地点は明らかではないが、春日地域では大谷遺跡かその付近の春日丘陵上で、後に青銅器生産の中心になる春日丘陵北端一帯から南に約1.5km離れたところと推定される。鳥栖地域では、細形銅武器鑄型のうちⅡ式b類とみられる戈1個(平原遺跡と大久保遺跡出土破片が接合)は使用後に流伝し(後期と6世紀の住居址で出土)、滑石片岩とアクチノ閃石製以外に石英長石斑岩製の剣鑄型、Ⅱ式a類矛と中細形剣の両面鑄型、中細形a類矛鑄型をも含む本行遺跡の鑄型も、出土遺構・層の時期は本来の使用時期から大きくずれている。これらは送風管の存在からも、出土遺跡かごく近辺における中期前半の生産を示すとしてよい。

佐賀地域の細形鑄型は吉野ヶ里遺跡で鑄造遺構SK04土坑に伴う4面鑄型<sup>16)</sup>(図2-13、1面は中細形a類剣)のほかに剣・矛と瘤付き棒状品鑄型4枚が出土し、SK04土坑またはそれと一連の鑄造遺構から廃棄したものとみられ、中期前半での生産が確実である。

この地域にはほかに鍋島本村遺跡のⅡ式b類戈、土生遺跡の鈍(角閃石)、仁俣遺跡の矛と武器の3面鑄型(以上は中期前半)、惣座遺跡の剣とⅠ式矛の3面鑄型(中期)がある。これらは鑄型の使用時期に収まる時期の遺構出土で、大きく移動していないとすれば、それぞれの遺跡か近辺での生産を示すものであり、吉野ヶ里遺跡以外でも分散的生産が行われたことを示す。

福岡地域の細形鑄型は大橋E遺跡包含層(時期不明)と雀居遺跡の古墳時代土坑出土の剣だけで、この地域での生産開始期の資料とはならない<sup>17)</sup>。隣接する春日地域からの持ち込みではなく本来この地域で用いたとしても、細形矛・戈の鑄型がないことと、次項でのべる中細形鑄型の急増から、福岡地域の青銅器生産の上限は中期中頃とみるべきであろう。

筑豊地域では飯塚市立岩一帯の下ノ方遺跡で砥石に転用した戈鑄型が採集されている。これだけでは当地域での生産は判断できないが、中細形b類戈鑄型もあって(図2-8)、遠賀川流域の中心地における中期前半～中頃の小規模生産の可能性はある。

粕屋地域には志賀島勝馬の中期包含層出土剣鑄型1枚がある(図2-16)。他の細形武器鑄型となる形態的特徴は細形の鑄型としては後出で、中期中頃～後半のものである<sup>18)</sup>。砥石に転用していないのでここでの生産も考えられるが、地域内の他所あるいは春日・福岡地域からの持ち込みとみられる。

熊本地域では、細形としては鑄型幅が広い点が異質で、砥石に転用した剣か矛の両面鑄型が中期の小ピットで出土し（白藤遺跡）、当地域唯一の鑄型である。当地域での鑄造を示すのか、砥石として北部九州から持ち込まれたのか判断できない。

(2) 中細形

中細形銅武器の鑄型数は、剣6個、矛19個、戈31個と、種類により顕著な差が認められる。細別型式が判明するのは、剣はa類のみで判明しないものもa類かb類で、生産しなかったc類はない。矛と戈はaからc類まですべてが発見されている。

剣鑄型が細形より激減するのは北部九州で剣を必要としなくなったため、それにかわり中国地域でc類銅剣の製作が始まり膨大な量が生産される。これに対し矛と戈の鑄型数はそれぞれ細形の3倍近くと10倍である。戈鑄型の極度の増加は、中細形から埋納が始まるなど需要が急増したためである。矛鑄型も増えるが、製品量が細形とかわらないのは細形製品に朝鮮製品がかなり含まれていたためであろう。

鑄型は8地域で出土する。剣・矛・戈すべてが出土しているのは春日地域（25個）、鳥栖地域（5個）、佐賀地域（6個）の3地域、剣と戈が出土しているのは福岡地域（9個）、剣と矛が出土しているのは早良地域（2個）、矛と戈が出土しているのは粕屋地域（7個）と筑紫地域（3個）、戈のみが出土しているのは筑豊地域（1個）である。春日地域の量が他を押し福岡地域がそれに次ぐ。

福岡地域の剣はa?類が1個だけである。戈はaないしbからbないしc類まであって、鑄造遺物から推定したよりも早い中期中頃からの製作が確実である。矛は細形と同じく生産の確証はない。

春日地域の剣は1個でa類かb類であろう。矛はa類からbないしc類まであり（12個）、確実なc類は今のところ確認されていないが存在するであろう。戈もa類からc類まですべての製作を行っている（10個）。この地域の矛と戈の鑄型数は、矛が鑄型総数19個中11個、戈が総数31個中10個を占め、生産量が他地域を圧倒していることがよみとれる。

鳥栖地域の剣鑄型は本行遺跡の細形Ⅱ式a類矛型の裏面の中細形（細別不明）ともみられるものだけである。矛はa類とa?類3個である。b類以降はみつかっていないが、後出の中広形矛鑄型は3個あるので、生産の中断はなかったとみられる。戈はc類1個だが、a・b類も製作したであろう。中細形の生産は続くが細形に比べると生産規模・量は小さくなったであろう。

佐賀地域の剣はa類が2個だけである。戈はa類1個とc類2個があり、製作が継続していることは確かである。矛らしいものはbないしc類1個だけで（姉遺跡1号鑄型）<sup>19)</sup>、この地域には中広形以降の矛鑄型がないことから、中細形段階で製作を中断したかもしれない。

早良地域の鑄型は、細形か中細形剣と中細形剣の両面鑄型1枚（西新町遺跡、古墳時代住居址埋土）とc類矛1個（有田遺跡、中期後半包含層）で、ともに砥石に転用されている。砥石用に持ち込まれたとみられ生産の可能性は低い。

粕屋地域の鋳型は久保長崎遺跡のc類戈両面鋳型1枚と、八田一括出土のc類戈片面鋳型3枚、b?類矛、c類戈の両面鋳型1枚である。久保長崎遺跡例は製作時期より遅れる後期前葉の住居址出土で砥石に転用していないが、福岡地域からの持ち込みかもしれず、当地域での鋳造の証拠としてよいかは判断しがたい。八田例は中広形剣鋳型1個1枚と一括出土したもので、一部欠損もあるが鋳型本来の形態をとどめ、一組とみられる戈片面鋳型2枚と中広形剣は鋳造に用い、鋳型面を砥石にした2枚はその痕跡がない。完形の鋳型が数枚まとまって出る例は福岡地域の高宮八幡所蔵広形矛・戈鋳型5枚しかなく、鋳造工房やその近辺では例がない。なんらかの埋納遺構出土とも推定したが(後藤 2000)、そうであっても埋納以前にこの地域での中期後半～末の生産を示す可能性はある。

筑紫地域の矛型1個はa類(隈・西小田遺跡第6地点12号住居址、中期末～後期初頭)、戈型2個はb?類(乙隈天道遺跡B区60号住居址、後期後半)とc類(永岡遺跡採集)で、いずれも砥石に転用されて型をいちじるしく失っている上、出土遺構の時期は鋳型使用時期から遅れ、この型式を本地域で鋳造した可能性はないと考える。

筑豊地域では砥石に転用したb類戈鋳型が1個採集されている(焼ノ庄遺跡、図2-8)。立岩地区での生産を示すとしても小規模な生産であろう。これ以後の鋳型はなく、生産はこの型式で終了するらしい。

### (3) 中広形

剣は製品・鋳型とも1点ずつしかなく、剣が銅武器から消え去る。矛型は14個、戈型は15個あり、いずれも中細形より減り、戈は半分になる。製品量は中細形にくらべ矛が7倍、戈が0.7倍で、矛鋳型が少ないのは発見量あるいは認定の問題であろう。

鋳型は7地域で出土している。矛と戈の鋳型は福岡地域(矛3個、戈4個)、春日地域(矛7個、戈9個)、筑紫地域(各1)、矛のみは鳥栖地域(3個)、戈のみは遠賀地域(1個)、矛か戈は早良地域(1個)である。中細形に引き続き春日地域の量が突出し、福岡地域と合わせれば4分の3を占める。佐賀地域には中広形も次の広形の鋳型もなく、生産が停止したか行われてもごく小規模になったとみられる。

福岡地域の矛はb類のみだが、中細段階から広形段階への一貫した生産が行われたであろう。戈も同様である。

春日地域の矛鋳型は他地域より多く、a類からcないしd類まであり、戈とともに大量の生産を行っている。

鳥栖地域では安永田遺跡の矛b類2個とbないしc類1個のみである。戈鋳型は未発見かもしれないが、武器生産は下火になり、中細段階からの生産低下傾向はさらに著しくなるようだ。

筑紫地域の鋳型2枚のうち矛鋳型は8～9世紀代の溝に混入した中広と推定される小片(砥石転用)で、春日地域からの流転とみられ、この地域での生産を示すものではない(国分尼寺遺跡7

次)。戈鑄型は井戸掘り中地表下4 mでの発見で、この地での生産を示すかもしれない(小田・中原前)。そうであれば本地域ではこの型式から生産が始まったことになる。

遠賀地域の戈型1個は中広形の中では細い方でしかも完形、砥石非転用である。これとともにもう1枚の鑄型があったという。生産していたかもしれない。

早良地域の鑄型は有田遺跡の矛または戈型片(古墳~奈良時代、砥石非転用)だけである。このほかに有田遺跡からは型ばらし時に割れたような武器鑄型片(中期後半~後期初頭)が出土していて、厚さは3.4cm以上、鑄型面の状態は感覚的だが中広形以降の武器鑄型を思わせ(図2-12)、出土地近辺での製作の可能性は高い。

粕屋地域では唯一の剣型が中細形c類戈、中細形b?類矛鑄型4枚と共に一括出土し、先にものべたようにこの地域での中期後半~末の生産を示すものであろう。

#### (4) 広形

矛型が26個、戈型が7個みつまっている。製品はすべてが矛といてよく、戈は5本にすぎないから、鑄型も矛が多いのは当然としても、戈型は製品よりも多い。

鑄型は8地域で出土する。福岡地域、春日地域、糸島地域、筑紫地域で矛と戈両方が出土し、早良地域と唐津地域では矛が、粕屋地域と鳥栖地域では戈が出土する。先行型式の鑄型がまったくなかった唐津地域と糸島地域にあらたに出現する。

量は春日地域が10個(矛8個、戈1個、矛か戈1個)、福岡地域が12個(矛9個、戈2個、矛か戈1個)で圧倒的に多く、ついで糸島地域の6個(矛5個・戈1個)、唐津地域の矛型2個1枚、筑紫地域の矛型・戈型1個ずつ、鳥栖地域の戈型1個となる。

鑄型量だけでなく鑄造遺構、鑄造遺物からも、春日地域とこれと一体となった福岡地域で大量の生産が行われていることはいうまでもない。

糸島地域の広形鑄型6枚はいずれも遺構に伴っておらず時期も不明であるが、鑄造作業時に割れたままとみられるものや本来の形と姿をよく残す使用直後のようなものがあり、数量も多いことから、地域内で広形矛・戈の生産が行われたとみてよいだろう。生産遺構・鑄造遺物は未確認であるが今後発見されよう。

唐津地域の矛両面鑄型は、鑄造時に割れたままの姿で、砥石に転用するなど再利用した痕跡はないが(大深田遺跡)、この地域で生産したかどうかは不明とせざるをえない。

早良地域の矛形1個は、切断して裏面を小形仿製鏡鑄型に転用し、この地域が使用済みの広形矛鑄型(破片か)を転用して小形仿製鏡を製作したもので、矛は製作していなかったかもしれない。

筑紫地域の矛と戈各1個はともに連結式鑄型の完形品で、砥石に転用しておらず、後期末と後期後半の時期が確認できる(仮塚南遺跡、津古東台遺跡)。この地域には鑄造の痕跡は未確認だが、後述する小形仿製鏡や釧鑄型とともに、地域内での鑄造作業後に廃棄されたとみられる。

粕屋地域の戈型は出土状況ははっきりしないが完形である(多田羅大牟田)。中細形c類矛・戈、

中広形剣に引き続き小規模な生産が行われたのであろう。

鳥栖地域の戈型は、出土地、出土状況不明である（江島）。広形矛・戈とも製品が出土しておらず、戈は製作したかもしれないが、矛の生産は行っていないだろう。

佐賀地域にも広形の鑄型はない。同時期の鑄型は巴形銅器と異形品の鑄型があり（吉野ヶ里遺跡）、青銅器生産は行われていても、武器の生産はないか、あってもごく少なかっただろう。

## 2) その他の種類

製品から推定される時期順にみていく。

### (1) 鉞

鑄型は筑豊地域の庄原遺跡（中期前半以前）と佐賀地域の土生遺跡（中期前半）で1個1枚ずつ出土し、製品の時期と一致する。土生遺跡例は角閃石製で、この地域で青銅器生産が始まった時期にあたり、出土遺跡か付近での製作に用いたのであろう。庄原遺跡例（石英長石斑岩製）は貯蔵穴出土で、当遺跡での生産は確定できないが、飯塚地区で製作に用いて出土地に流伝したとも考えられる。いずれも中期前半に当該地域での青銅器生産を示す。

### (2) 小銅鐸

鑄型は春日地域と筑豊地域で8個出土している。筑豊地域の2個は砂質凝灰岩製<sup>20)</sup>（北九州市松本遺跡、前期末～中期初頭）で、別個体と判断され（あるいは一組をなすか）、注湯の痕跡はない。時期からしてもっとも古い小銅鐸鑄型で、朝鮮銅鐸を模したものであろう。この地での鑄造の証拠となるかは判断できない。

春日地域では6個出土している。大谷遺跡（中期後半）と岡本遺跡（時期不明）で出土した滑石片岩ないし滑石岩製鑄型は中期前半の鑄造に用いたであろう（図2-15）。ほかには後期の石英長石斑岩製で、確かなものとやや疑わしいものが2個ずつである（須玖永田遺跡、須玖坂本遺跡）。春日地域では中期前半以来後期に至るまで少量を生産し続けたとみられるが、中期中頃～後半の鑄型はみつかっていない。

### (3) 棒状品

直径数mmの用途不明棒状製品を作る型が5個出ている。瘤がつく同形同大のものは鳥栖地域の本行遺跡で3個、佐賀地域の吉野ヶ里遺跡で1個出土した。本行遺跡例はこれ専用の鑄型に平行して2個を彫るもの（図2-14、滑石片岩ないし滑石岩製）と細形Ⅱ式a類矛型の横に平行する1個、吉野ヶ里遺跡例は細形?剣鑄型のD面の1個である。同じ鑄型に彫った剣と矛型と石材により中期前半に用いたことが明らかである。瘤のない棒状のものは春日地域の筒状品の横に平行して彫った直径6mm、長さ12cmの1個で（須玖坂本遺跡）、横に彫った筒状品から後期後半である。



(4) 銅鐸

福岡地域の赤穂浦遺跡で1個（中期後半～後期包含層）、鳥栖地域の安永田遺跡で5個（中期末住居址、土坑）、本行遺跡で1個（後期後半堆積層）、粕屋地域の勝浦高原遺跡で1個（中期後半貯蔵穴）、合計6個が発見されている。

福岡、鳥栖両地域の型は外縁付鈕式横帯文銅鐸で、安永田遺跡では中期後半～末に中広形矛とともに生産していることが確実である。本行遺跡近辺でもこの時期に製作しただろう。福岡地域では出土地ではないにしても、地域内のどこかで製作したとみられる<sup>21)</sup>。

粕屋地域の鋳型は横帯文銅鐸鋳型とみられるが、鈕を彫り込んでおらず、身の彫り込みも最終段階にはいたっていない粗加工段階のままで、神戸市西神65地点出土の銅鐸鋳型2枚（神戸女子大学遺跡調査会 1992）とよく似ている。出土遺跡での鋳造作業は考えられず、本遺跡または周辺で石材を得て粗加工し、鋳造地に運び込む前になんらかの事情で廃棄されて残ったと考えられる<sup>22)</sup>。

(5) 銅鏃

有茎鏃鋳型は福岡地域の1個を彫った2枚、2個1連を彫った1枚（井尻B遺跡、図2-17、後期中頃と後半）、春日地域の中細～中広形矛ないし戈型裏面に少なくとも2連3列を彫った1枚（御陵遺跡、古墳時代初頭）、大形武器鋳型を転用してA面に7連7列、B面に4連2列彫った57個1枚（須玖坂本遺跡、後期）、筑紫地域の小形仿製鏡鋳型C・D・E面に2個1連と単体1個を彫った4個（ヒルハタ遺跡、後期）である。御領遺跡の6個と須玖坂本遺跡のA面の49個は身長2.5～2.8cmの通常の有茎鏃であるが、ほかは身長4～4.5cmで、ヒルハタ例以外は身に接する茎部分に膨らみをもつ。製品は雀居遺跡（第5次）例くらいしかないが、これは身長3.2cmで短い（福岡市教育委員会 1995）。

凹基鏃は大形鋳型転用の小銅鐸鋳型と筒形銅器鋳型それぞれの側面に単体で彫った大形品2個（須玖坂本遺跡、後期、長さ6cm）で、製品例はなく、大きさからは儀礼用か、鏃ではない疑いもある。

すべて後期の生産に用いている。

(6) 銅釧

鋳型は筑紫地域の1個（宮ノ上遺跡、後期中頃）、粕屋地域の2個1枚（香椎松原、時期不明）と鉤部らしい型が残る小片1枚（浜山遺跡、中期中頃～後半）、春日地域の武器?鋳型裏面に彫った鉤の有無不明の破片1個（須玖岡本遺跡群、時期不明）である。浜山例以外は砥石転用品ではなく、出土地域で用いたとみてよい。鉤がまっすぐの浜山遺跡例は最も古い銅釧製作を示し、ほかは後期に用いたものであろう。

(7) 小形仿製鏡

製品は九州だけでなく関東、北陸までの各地で多数出土し（後期）、近畿でも製作している（大阪府垂水遺跡出土鑄型（北九州市考古博物館 1997））。

鑄型は4地域で出土している。春日地域では鏡背3面分4個（内行花文日光鏡系Ⅱ型a類、b類、文様不明）と鏡面1面分1個、福岡地域では鏡背1個（図2-17、内行花文日光鏡系Ⅱ型の異形）、早良では鏡背（内行花文日光鏡系Ⅱ型a類）、鏡面各1個、筑紫地域では鏡背1個（内行花文鏡系Ⅱ'型）、筑後地域では表裏に鏡面と鏡背を彫る1枚（文様は異形）が出ている<sup>23</sup>）。時期は判明するものは製品とおなじ後期、広形銅武器の段階である。春日地域に多いのはこの地域の青銅器生産状況からは当然であろうが、数も多く広形矛ほど高位の儀礼具ではないために、この時期に青銅器生産を行った各地で製作したのであろう。ただし筑後地域例がこの地域での製作を示すかは即断できない。

(8) 巴形銅器

鑄型は春日地区の九州大学筑紫地区遺跡（古代包含層）と佐賀地区の吉野ヶ里遺跡の環濠（後期初頭～前半）で1枚ずつ出土し、ともに座が大きな裁頭円錐形のⅣ類（後藤 1986b）である。前者は春日地域での生産、後者は出土遺跡での生産を示す。

(9) 十字形金具

筑紫地域の小形仿製鏡裏面に2個1連を彫り込み、中央に鈕を設ける（ヒルハタ遺跡）。製品の出土例はない。後期にこの地での製作が考えられる。

(10) 筒状品

鑄型は春日地区の須玖坂本出土の1個だけである。製品は粕屋地域の新宮町夜臼・三代地区遺跡群で1点出土し（後期後半）、法量は似るがこの鑄型と一致はしない（新宮町教育委員会 1993）。

(11) 異形品

佐賀地域の吉野ヶ里遺跡出土の軽く彎曲する円盤状の型2連（後期初頭～前半、型部分が黒変）と鳥栖地域の袖比前田遺跡出土の魚型（中期初頭～前半、注湯の痕跡はない）は製品はみつかっておらず用途も明らかでない。前者は巴形銅器鑄型とともに本遺跡での生産を示す。筑豊地域の下ノ方遺跡出土破片（中期）、筑後地域の上枇杷遺跡出土破片（中期前半）、福岡地域の雀居遺跡出土破片（細形銅剣鑄型裏面、古墳時代）は製品の形態が想像し難い。筑後地域のものは時期からすると鳥栖、佐賀地域からの流入品かとも見られ、この地域での生産を示すものではなからう。

(12) 不明品

ほとんどはすでにふれたように、注湯時や型ばらし時に割れた型の一部が残る小さな破片である。春日地域で36個（図2-9～11）、福岡地域と鳥栖地域で2個ずつ出土し、種類が判断できる鋳型小片とともに鋳造地点を限定する積極的根拠となる<sup>24)</sup>。

#### 4. 生産地域の変遷と製品

##### 1) 青銅器生産時期の区分

鋳型、鋳造遺物、鋳造遺構から検討してきた生産地域の変遷によって、青銅器生産の時期を第1期～第3期にわけ、第2期と第3期を前・後に細分することができる。おおまかには第1期が中期前半で上限は中期初頭あるいは前期末に上がるだろう。第2期は中期中頃から後半でそれぞれが前半期、後半期となろう。第3期は中期後半～末から後期後半で、後期前半からが後半期、それ以前が前半期となる。

第1期に青銅器生産を行ったのは核地域4地域のうちの佐賀地域、鳥栖地域、春日地域の3地域で、第3期まで継続する。筑豊地域でも少量の生産を行ったかもしれない。朝鮮半島製品を模した細形銅武器と少数の鉈、小銅鐸および瘤付き棒状品を生産し、長い間をおかずに最初の大形製品である中細形銅武器生産が始まり、細形銅武器生産と平行した時期である。

第2期の生産地域は第1期からの佐賀、鳥栖、春日地域にあらたに福岡地域が加わる。筑豊地域で推定された生産は後半期までには終わってしよう。隣接地域のうち粕屋、筑紫地域でも後半期に小規模生産の可能性はある。本期には細形銅武器の生産は徐々に減り、中細形銅武器の生産が高まる。

第3期の生産地域は春日地域、福岡地域、鳥栖地域、佐賀地域のほかに、隣接地域の粕屋地域と筑紫地域で前半期からの生産が確かであり、早良地域、遠賀地域でも生産した可能性はある。さらに後半期には糸島地域でも生産が行われ、唐津地域、筑後地域での生産の可能性は曖昧だが否定はできない。前半期には中広形銅武器と銅鐸が生産され、後半期には広形銅武器のほかに小形仿製鏡、銅釧、鏃、巴形銅器、小銅鐸、十字形金具など多種類の生産が行われた。

##### 2) 第1期

この時期の生産がもっとも多い細形銅武器の鋳型には第2期のものも含まれ区分は難しい。しかし製品の3分の2以上が第1期とみてよく<sup>25)</sup>、製品に占める朝鮮半島製品を考慮しても<sup>26)</sup>、細形銅武器鋳型のうち第1期の鋳型の割合は3分の2近くに達するだろう。

細形銅武器鋳型の3分の2を剣が占めている。製品量も、朝鮮半島製品をふくむが、剣が鋳型とほぼ同じく3分の2を多少上回る。剣製品は20%近くが中国、四国地域で出土し、これら地域では製作していなかったであろうから、北部九州から移出したはずである。武器としてあるいは儀器として剣が重視され、さらに中国、四国に移出するためにも必要であったために剣の鋳型が多いので

あろう。

この時期の大きな問題点は、朝鮮半島製品の移入と細形銅武器生産開始の問題であるが、これについては各地域での細形銅武器のあり方をみる必要がある。

細形銅武器製品の出土地域と量をみると、佐賀地域を除く生産地域には少なく、生産の確証がまったくない地域に大量にみられるという現象がある。

生産地域の数量と判明する時期は、佐賀地域が28本（剣24本、矛1本、戈3本）でもっとも多い。吉野ヶ里遺跡の中期中頃～後半（生産第2期）の7本（中細形b類剣を入れると8本）以外は前期末～中期前半（生産第1期）で、1～2本を副葬する墓地遺跡が点在する。鳥栖地域は8本（剣6本、矛1本、戈1本）すべてが柚比地区（柚比本村遺跡、安永田遺跡）に集中し、中期中頃の1本以外は中期中頃～前半（生産第1期）である。春日地域は11本（剣6本、矛4本、戈2本）すべてが須玖岡本遺跡群に集中するが、時期が中期中頃～後半（生産第2期）で、佐賀、鳥栖地域より上限の遅いことが注意される。

これに対し生産の痕跡が認められない地域では、早良地域がもっとも多く33本（剣24本、矛4本、戈5本）で、吉武高木・大石遺跡に22本が集中し（中期中頃）、これ以外も前期末～中期中頃（生産第1期はじめあるいは第1期以前）で、中期中頃・後期中頃は3本にすぎない。唐津地域の24本（剣13本、矛9本、戈2本）のうち15本は宇木汲田遺跡に集中し（前期末～中期中頃だが中期前半＝生産第1期が多い）、ほかの遺跡も同じ時期で上限が前期末（生産第1期以前）に上がる。粕屋地域の13本（剣5本、矛4本、戈4本）のうち馬渡・東ヶ浦遺跡の4本と竹重遺跡の2本は中期中頃、久原遺跡の2本は中期前半で生産第1期であり、ほかの時期が判明するものは中期中頃と後期中頃である。

筑紫地域の12本（剣10本、矛、戈各1本）のうち矛と戈は出土状況不明だが、剣は前期末の1本以外は中期前半～中頃（生産第1期～第2期前半期）で切先が6本、副葬品2本である。福岡地域の11本（剣6本、矛5本）のうち7本は板付遺跡に集中し（前期末～中期中頃、生産第1期か以前）、残りのうち剣1本が中期後半である。糸島地域の8～9本（剣6～7本、矛・戈各1本）は5遺跡に分散し、時期が明らかなものは中期中頃～前半の久米遺跡副葬の剣・戈各1本である。筑豊地域の8本（剣5本、矛1本、戈2本）のうち2本は鎌田原遺跡に中細形a類戈2本とともに副葬され、ほかの時期がわかる3本とともに中期前半（生産第1期）にさかのぼる。

このように玄界灘に面し、第1期には細形銅武器を生産していなかった唐津、早良、福岡、粕屋地域にまず青銅武器が集中する現象は、その中に多数の朝鮮半島製品を含むことを物語るのであろう<sup>27)</sup>。

これに対し上限が前期に上がらず集中副葬武器に中細形b類剣をも含む鳥栖地域、中期中頃を上限とする春日地域の銅武器はおそらく第2期前半期の弥生製品であろう。春日地域の細形戈2本もⅠ式b'類（久我屋敷型、時期不明）とⅡ式b2類（水城型、中期後半）で、明らかに弥生製品であり型的に遅れる。

このような第1期における製品と鋳型の分布のずれは、青銅器生産開始について示唆的である。

第1期のはじめ頃には生産量も少なく、多くは朝鮮半島から玄界灘沿岸の唐津、早良、福岡、粕屋地域に移入されて一墓地に集中・多量副葬され、一部が佐賀地域や筑豊地域その他に入ったと考えられる。また唐津、早良地域は領域も狭く後背地と直接境を接していないため、青銅器の配布などによる隣接地との関係強化の必要性が低く、積極的に技術を導入して自己生産を行う必要が低かったと推定できる。この地域的条件と青銅器生産を行わなかったことなどがあいまって、生産第2期以降福岡地域や佐賀地域の後塵を拝する結果をもたらしたのである。

これに対し、朝鮮製品を直接入手しがたい佐賀地域は領域も広く、鳥栖地域は筑紫、筑後地域と接しており、両地域は領域内の安定だけではなく他地域との関係保持のためにも青銅器の必要性が高く、積極的に自己生産の方途を探り生産を始めたのであろう。

また福岡地域も後背地の粕屋、筑紫さらには筑豊地域ほかの外縁地域、遠隔地域との交通関係強化のために青銅器の需要が高く、自己生産を行う必要があり、最初の生産地を緊密な関係にあった春日地域に求めたのではなかろうか。

福岡地域と春日地域は冒頭にも述べたように、福岡平野として一帯の地域である。前期には微々たる集落数であった春日地域では中期初頭から前半に春日丘陵を中心に集落数が激増し、中期後半にむけ谷水田の経営から丘陵裾部段丘面での水田開発へ進み地域的发展を遂げていく(小沢 2000)。中期初頭からの集落増加の一因は福岡地域からの分村などによる人間の移動でもあろう。

中期中頃までは福岡地域が福岡平野の主導的地域で(前期末～中期初頭の中心は板付遺跡であろう)、第1期の青銅器生産の主体も福岡地域にあって、春日丘陵南部の大谷遺跡付近に工房を設けたとみられる。次の時期にも言及すれば、第2期前半期にもこの状況が続くとともに福岡地域にも工房を設け、この頃から須玖岡本遺跡D地点の厚葬墓に象徴されるように、春日地域が福岡地域にかわって福岡平野の中心部となったと考えられる。それにともない春日地域が青銅器製作の主体に上昇し、以前とは逆に福岡地域にも生産量をまかなうために春日地域の主導のもとで青銅器生産工房が拡大されることになる。

第1期の福岡地域主導のもとでの春日地域の製品は春日地域にはほとんど残されず、福岡地域内で用いるとともに、筑紫地域をはじめとする隣接地域に相当数移出され、さらには外縁地と遠隔地にも少数が持ち出されたとみられる。ちなみに春日地域と福岡地域に矛と戈の鋳型がないか少ないらしいことは、それらに儀器的性格が強いのに対し、移出先のひとつである筑紫地域に剣が多くしかも多くが切先として出土するように、武器としての剣の需要が高かったからであろう。

佐賀、鳥栖両地域もまた剣のほかにも矛、戈をも生産して一部を外部へ積極的に移出して、地域間の関係強化を図ったであろう(その中心が吉野ヶ里遺跡である)。したがって筑紫地域や筑後地域の製品には、佐賀、鳥栖製品が含まれていよう。しかし、おそらく福岡地域からの移出量が増大するとともに、両地域での生産は伸張しなかったことがその後の状況からうかがえる。

この時期の生産体制は、佐賀地域の吉野ヶ里遺跡、鳥栖地域の本行遺跡付近、春日地域の丘陵南

部が示すように、限られた地点での集中的生産であろう。ただし佐賀地域ではそれと平行して武器や鍔の小規模生産も行われたようである（鍋島本村遺跡，土生遺跡，仁俣遺跡）。筑豊地域での生産が確かであればこれも小規模生産であろう。春日地域にもこうした小規模生産が併存したかは明らかではない。

以上の想定に誤りがないとすれば、青銅器生産は朝鮮半島製品を入手しやすかった地域ではなく、入手が困難でかつ他地域との関係を重視せざるを得なかった地域で始まったといえそうではある。しかし技術や原材料を朝鮮半島から導入せねばならないことを考えると、玄界灘沿岸地域との連携なしには始めることはできず、佐賀、鳥栖両地域の生産に沿岸地域の関与がなかったとはいきれまい。あるいは沿岸地域とは無関係に、有明海を通じての技術導入があったのかもしれない。佐賀平野に多い朝鮮系無文土器はこれと関係するかもしれないが、どんなに早くても第2期後半期（中期後半）になって始めて青銅器生産を行う筑紫地域にもそれより早く朝鮮系無文土器が大量に出現していることをどのように考えるかの問題がある。また鑄型石材の入手、運搬に佐賀平野や鳥栖地域が有利であったことが、この地域で生産が始まった理由かもしれない<sup>28)</sup>、福岡平野地域も石材などの面で連携していたであろう。

この時期には鍔と小銅鐸の生産も行われた。いずれも朝鮮製品の仿製として始まる。鍔の製品は少ないながら福岡，早良，粕屋，筑紫，筑後，鳥栖，佐賀，熊本地域で出土しているが、第2期には継続しない。この時期の小銅鐸の製品は筑豊地域の原田遺跡例（中期中頃以前，嘉穂町教委 1987）しかないが、春日地域とあるいは筑豊地域製品が各地に点的に散在するのであろうし、それを模した土製品も点在する。

第1期には銅武器が大形化し始め、中細形a類が生まれる。最初のa類の鑄型は、剣は佐賀地域で2個，?付きが福岡地域で1個，矛は春日地域と筑紫地域で各1個，鳥栖地域で3個，戈は春日地域，鳥栖地域各1個である。第2期にも引き続き生産しており，次項で検討する。

### 3) 第2期

この時期に福岡地域でも生産が始まる。細形銅剣の生産は次第に少なくなり，後半期には製作してもごくわずかになる。それにかわって第1期に始まった中細形銅武器の生産が増大する。なお中細形剣に附属する青銅製把頭飾を製作したはずだが，鑄型が土製であったためか発見されていない。銅鏃や小銅鐸も生産したとみられるがこの時期と認められる鑄型はみつかっていない。

中細形銅武器鑄型の量は春日地域と福岡地域を合わせると59%に達し，福岡平野での生産量が突出していたことが明らかである。春日地域では生産量が増大し，福岡地域にも製作工房が拡がり，大量の生産をまかなったとみられる。佐賀地域と鳥栖地域での鑄型量は少なく生産量も少なかったであろう。粕屋地域でも生産が始まるが後半期に降り，筑紫，早良，筑豊地域には生産の確証はとぼしく，生産したとしても後半期であろう。

中細形銅武器鑄型のなかでもとくに戈が急激に増え50%を越える。製品量も戈が最も多く（65

%), 劍 (c類は除く, 22%) と矛 (13%) ははるかに少ない。

劍は細形に比べ鑄型数で20%, 製品数 (九州で製作しないc類は含まない) で30%に激減する。九州の中細形a・b類劍のほとんどは副葬され, 核地域でも用いるとともに, 隣接地域, 外縁地域, 遠隔地域にも移出されている<sup>29)</sup>。

矛は細形に比べ鑄型は倍以上に増えるが製品量は変わらない。製品は春日地域に5本 (副葬), 福岡地域に5本 (埋納) あるが, 鳥栖地域と佐賀地域にはなく未発見と思われる。福岡, 春日地域以外では隣接地域に1~2本ずつ, 外縁地域でも熊本地域の6本しかないが, 細形が皆無とってよい四国, 中国地域で製品の約25%が出土し, 遠隔地への移出が生産の主要目的にかわっているようである。

戈が急増するのは中細形から埋納が始まり需要が大きくなったためであろう。埋納例は劍, 矛より多く8ヶ所に達し (北部九州各地域と熊本地域, 不確かながら佐賀地域), a・b・c類すべてをふくむ。さらに1ヶ所の埋納量も30~50本近くになることもあって, 戈の需要が急増したことが明らかである。これに対し戈の副葬は春日・筑豊・唐津・糸島地域に限られる。

大量に生産された戈は春日地域と隣接地域に多く, 外縁地域には少なく, 遠隔地の中国, 四国地域ではきわめて少ない。急増する戈の生産は生産地域 (とくに春日地域) と隣接地域での埋納需要の増大を満たすためであった。とくに筑紫地域に66本が埋納されていて, 九州出土製品量の47%を占め, 春日地域の29%より多く, 1~7本にとどまるその他各地域をはるかに凌駕する。

筑紫地域の大量の中細形銅戈は, 一部を南西の鳥栖・佐賀地域から得たかもしれないが, ほとんどは北に隣接する春日地域から入手したものであろう。中期中頃から後半にこの地域内の諸集団が春日地域との結びつきを強め, また楽浪郡と積極的に交渉し始めた福岡平野地域も後背地であるこの地域を重視し, 安定を図る必要から大量に生産し配布したのであろう (後藤 2001)。

糸島地域の中細形銅武器は三雲南小路1号甕棺墓 (中期末) 副葬の有柄式中細形劍とc類戈各1本とa類矛2本のみである。有柄式中広形銅劍を弥生製品とすれば製作地は春日地域だろうか。矛, 戈は春日地域からもたらされたものであろう。

このように, 生産第2期にさかんな中細形銅武器の生産は細形段階と同様, 福岡地域, 春日地域, 鳥栖地域, 佐賀地域にほぼ限定され, その中でも春日地域がもっとも生産規模が大きくまた中細形のすべての細別型式を製作している。後半期にはとくに戈の生産量を確保するために粕屋地域でも生産し, 製品は遠賀, 筑豊地域に移出されたともみられ<sup>30)</sup>, その生産, 移出には春日地域がかかわっていたであろう。この時期の後半期には先に区分した核地域, 隣接地域, 外縁地域, 遠隔地域の区分がはっきりし始める。

#### 4) 第3期

春日地域は福岡地域とともに, 鑄型量, 鑄造遺物・遺構いずれをとっても大工房群を運営し最も多く生産していたことは疑いない。鳥栖地域では前半期中広形矛や銅鐸の生産を行っているが,

後半期の生産を推定できるのは広形戈鑄型 1 個にすぎない。佐賀地域では巴形銅器と異形品鑄型から後半期の生産が認められるが、前半期の生産の確証はない。両地域の青銅器生産は生産量、規模とも大幅に縮小したのであろう。

粕屋地域では第 2 期後半にひきつづき生産し、筑紫地域と早良地域でも前半期から小規模生産を行ったとみられる。遠賀地域では前半期の、粕屋地域、筑後地域では後半期の小規模生産の可能性がある。さらにこれ以前の鑄型がまったくなかった唐津地域と糸島地域にも鑄型が登場し、後者では後半期に確実に生産が行われた。

前半期には中広形銅武器を大量に生産し、ほかに福岡地域と鳥栖地域で外縁付鈕式銅鐸を生産し、後半期には広形銅武器のほかに小形仿製鏡など種々の製品をつくっている。これらも鑄型数、生産遺構からみて春日地域が福岡地域とともにほとんどを生産していた。

前半期に生産した中広形銅武器は中細形にくらべ、鑄型は矛、戈とも減りとくに戈の減少がいちじるしいが、製品は矛が 6 倍近くに増え戈が 70% に減り、矛の需要の急増と戈の落ち込みが認められる。

九州内の矛の製品は鑄型が最も多い春日地域に 20 数本、鑄型が出ていない佐賀地域に 10 数本と多いが<sup>31)</sup>、隣接地域の唐津、糸島、早良、粕屋地域にはなく、筑紫、鳥栖地域はわずかである。これに対し外縁地域には若干数ずつ出土しており、遠隔地域では対馬が春日地域とほぼ同数、壱岐が 4 本で、朝鮮半島南部でも出ている。中国、四国にも多く製品量の 3 分の 1 ほどを占める。矛は中細形と同じく生産地域内での需要の他に、遠隔地への移出を主目的にこの時期に大量生産し、移出先になんらかの基準のあったことが窺える（下條 1991）。

戈は春日地域が 30 数本と最も多いが福岡、鳥栖地域にはなく、佐賀地域も 2 本にとどまる。隣接地域、外縁地域では筑紫地域の 19 本、筑豊地域の 13 本のほかは皆無か 1～3 本のみである。遠隔地でも四国、近畿とそれ以東、対馬、朝鮮半島南部それぞれ 1～2 本にとどまる。主生産地の春日地域と一部の隣接、外縁地域での需要のための生産であったとみられる。

また前半期には外縁鈕式横帯文銅鐸の製作が中広形銅武器生産とともに鳥栖地域と福岡地域で行われたが、製品は吉野ヶ里遺跡出土品以外は中国地域に多く、もっぱら移出用に生産したとみられる。同地域からの委託生産ともみられるが、この間の事情は別途の検討を要する。

このように春日地域は青銅器生産の独占的中心地としての地位をほぼ完全に確立した。中広形の鑄型は丘陵南部と東側平地で出土した砥石転用の破片数点以外は、春日丘陵北端からその北の一带で出土し、この地区に青銅器生産工房が集中し生産体制が充実し始めたことを示している。

後半期の主要製品は広形銅武器、なかでも矛である。

矛の製品量は中広形の 80% 以下に減るが<sup>32)</sup>鑄型は倍増している。鑄型の出土量は春日地域と福岡地域があわせて 3 分の 2 を占め、ほかは糸島、唐津、早良、筑紫地域で出土し、鳥栖、佐賀地域にはない。福岡平野地域の独占的生産といえるが、それまでの鑄型がなかった糸島地域での出現と量が注意を引く。



製品は九州島内では春日地域が23本と最も多く、鳥栖地域にはなく佐賀地域も3本だけである。隣接地域では糸島地域と早良地域にはなく<sup>33)</sup>、唐津地域に1～2本、粕屋地域は破片1点、筑紫地域は耳1点のみであり、外縁地域では南の筑後、熊本地域よりは東の大分地域、筑豊地域に多い。遠隔地域では四国、中国が中広形の3分の1近くに減るのに対し、対馬が3倍に増え製品量の50%を占め、さらに朝鮮半島南東部でも数本出土している。

このように広形矛を大量生産していた春日地域は、手元に少数の製品をとどめて地域内に埋納するが、それ以外は隣接地域をとびこえて九州内の東側外縁地域と海をへだてた四国、対馬とくに後者に大量に移出していることが明らかで、中広形以来の遠隔地への大量移出を目的とした生産が継続している。

そのために隣接地域にも工房を進出させている。とくに福岡地域、春日地域に次いで鋳型が多い糸島地域に製品がないことは象徴的である。後期に海関のような機能をしていたらしいこの地域からおそらく対馬に移出する量を確保するために、この地でも製作したとみられ、そこには春日地域の関与のあったことがうかがえる。唐津地域も生産したとすれば同様に考えられ、筑紫地域も筑後川を経由する大分地域への移出用生産を行ったのであろう。

戈の鋳型は6地域で7個出土している。福岡地域が2個でほかは1個である。製品は筑後地域の埋納例1本(日永遺跡)、大分地域の2本(美和雷)、伝筑後2本の計5本だけである。九州島内の地域的祭器として各地で少数使用したらしく、福岡平野以外でも分散的に生産したのだろう。

この時期にはほかにも多種類の生産を行っている。

銅釧の鋳型は春日地域、粕屋地域、筑紫地域で4個3枚が出ている。製品は唐津地域、佐賀地域、壱岐、対馬で1～3点ずつのほか、中国、四国、近畿、北陸、東海、関東などで26点(時期は後期～古墳時代が主で、中期後半とみられるものが2点)出土している。製品と鋳型の分布が重ならないので(木下 1996)、もっぱら外部への移出のために製作したのだろうか。なお生産開始期は製品の時期からは第2期後半期に上がるだろう。

小形仿製鏡の鋳型は春日、福岡、早良、筑紫、筑後の5地域で出土し、春日地域が5個で最も多い。九州内外の広い需要に応じるために生産の分散化が図られたのであろう。

巴形銅器Ⅳ類は鋳型が春日地域と佐賀地域で2個出土し、製品は糸島地域、熊本地域、中国地域、四国地域で2～5点ずつ出土している。鋳型出土地域には製品がないが未発見であろう。製品出土地は広く、大量生産ではないが広い地域に点的に移出しているようだ<sup>34)</sup>。

小銅鐸は鋳型が春日地域で出土し、製品は福岡、早良、糸島、大分地域で1点ずつ出土する。鋳型による製品はみつからないが、製品の時期からは第1期以来少数が作り続けられ、後期にも九州内に移出されている。生産地域が春日地域に限られるかはわからない。

## 結

弥生時代の九州における青銅器生産は朝鮮半島製細形銅武器と鈍、小銅鐸の仿製から始まる。生

産開始の時期は資料の現状からは中期前半であるが、中期初頭あるいは前期末にさかのぼる可能性は排除できない<sup>35)</sup>。

生産を開始したのは春日地域、鳥栖地域、佐賀地域の3地域で、筑豊地域で若干の生産が考えられる(第1期)。朝鮮半島製品を入手し難いあるいはできず、地域内外の需要に応じられない佐賀地域と鳥栖地域、そして入手はできたが量が少なく隣接地域への移出の必要に迫られた福岡地域の主導により春日地域で生産が始まったと考えられる。

第1期のうちに銅武器各種は大形化しはじめ中細形が生まれる。その生産は第2期に入って盛んになる。第2期前半期には福岡地域でも生産が始まり、後半期には需要の増大から早良、粕屋、筑紫地域でも生産が始まった可能性はあるが確実ではない。

中細形銅武器のなかでは戈が九州内での大量埋納のために需要が大きく、最も多く生産された。剣と矛は少なく、剣は生産地域と隣接地域だけでなく外縁地域と遠隔地の中国、四国に移出されている。矛は生産地域と外縁地域での出土が多く遠隔地にはほとんどない。

生産の核となる春日、福岡、鳥栖、佐賀の4地域のなかで、大量の生産を行う福岡、春日の福岡平野地域の優位性が確立し、福岡平野内では主導性が春日地域へ移動するとともに、この地域の差配のもとで生産量を補うために生産を行ったかもしれない早良、粕屋、筑紫の隣接地域、生産はせず製品を入手するだけの外縁地域と遠隔地域という青銅器の生産、移出をめぐる地域間の関係が後半期には姿をあらわす。

第3期前半期には核地域の間の格差が明白になり、春日地域を中心とする福岡平野地域の生産が他を圧倒し、それに対比しての鳥栖、佐賀地域の生産規模の低下は覆い難くなる。ただ鳥栖地域は銅鐸を生産し技術力は衰えてはいない。前時期に姿を現した核地域、隣接地域、外縁地域、遠隔地域の関係は実に明確になる。早良、粕屋、筑紫そしておそらく遠賀地域の隣接地域では補助的な生産が行われている。

第3期後半期には広形銅矛の春日、福岡地域での集中大量生産、それを補う糸島地域での相当な生産、筑紫地域でのある程度の生産が行われる。そのほか必要量は少ない広形戈、巴形銅器、銅釧、小銅鐸の生産が福岡平野地域と隣接地域、鳥栖、佐賀地域で行われ、必要量の多い小形仿製鏡、銅鏃の生産が春日、福岡地域の隣接地と、あるいは外縁地のうちの筑後地域で行われる。

青銅器生産地域は九州各地域の弥生社会の相互関係のもとで変遷しているのであり、製作技術や鑄型石材、原材料の入手、工人の組織が主導的要因ではなかった。現状では製品の生産地による差異ははっきり見出せておらず、なによりも型式変化が各生産地域一様に進んでおり、形態の規格性が強いことから、北部九州社会全域にわたる規制が浸透しており、生産も技術の交換もそのような規制下で行われたとみられるからである。

このように、最初に生産を始めた四つの核地域が一貫して生産を継続し、生産量の増大に伴って隣接地域に生産地点が設けられていき、核地域のうち2地域の生産規模が縮小していくとする青銅器生産地域の変化を描いたが、正鵠を射ているかどうか。遅れて小規模生産を始める地域の実態、

動向、製品流通そして生産組織の問題を掘り下げ、関西地域の生産状況と対比すればやや異なった結論が得られるかもしれない。

謝辞 本稿が成ったのは資料調査でお世話頂き、多々ご教示下さった多くの方々のおかげである。お名前を記して感謝する。

丸山康晴、平田定幸、吉田佳広、境 靖紀（春日市教育委員会）、藤瀬禎博、向田雅彦（鳥栖市教育委員会）、堤 安信（千代田町教育委員会）、永田稲男（三日月町教育委員会）、田平徳栄、中牟田賢治、蒲原宏行、七田忠昭、渋谷 格、徳永貞紹（佐賀県教育委員会）、林田和人（熊本市教育委員会）、田中壽夫、横山邦継、屋山 洋、中村啓太郎、下村 智、宮井善朗、池田祐司、長家 伸、常松幹雄、力武卓治（福岡市教育委員会）、藤丸詔八郎、故松永幸男（北九州市考古博物館）、佐藤浩司（北九州市教育文化事業団）、奥村俊久、草場啓一（筑紫野市教育委員会）、舟山良一（大野城市教育委員会）、池ノ上宏（津屋崎町教育委員会）、村上 敦、古川秀幸（二丈町教育委員会）、川端正夫（甘木市教育委員会）、片岡宏二（小郡市教育委員会）、江島伸彦（田主丸町教育委員会）、嶋田光一（飯塚市歴史資料館）、岩本教之（添田町教育委員会）、橋口達也、水ノ江和同（福岡県教育委員会）

註

- 1) さまざまな鑄造関係遺物のうち、中型、取瓶・坩堝、銅片・溶銅片など鑄型（外型）以外を便宜的に「鑄造遺物」と総称する
- 2) 鑄型に彫った製作品のかたちを「型」とし、これを数える単位を「個」とする。鑄型ひとつひとつを数える単位は「枚」とする。
- 3) 型の一部や黒変部が残る砥石にも転用していない小片は、注湯時や型ばらし時に割れて捨てたものとみられ、出土地点付近に鑄造工房があったことの積極的証拠となるが、小片のために型の種類や型式がわからないという難点がある（図2-9~11）。
- 4) 後藤（2000）では飯塚地域としたが改める。
- 5) 便宜上、大形化した武器を武器形祭器とはよばず、細形から広形まですべてを銅武器とよぶ。
- 6) 型式分類は岩永（1986）により、細形銅戈については吉田の分類を用いる（吉田 2001）。広形銅戈をa類とb類にわけるのは緒方（1994）による。小形仿製鏡は高倉（1990）による。なお鑄型の型式判断は形態的特徴がとらえられない場合にはもっぱら法量によらざるを得ない。
- 7) 須玖岡本遺跡D地点の細形Ⅱ式a類（岩永 1982）を吉田は中細形a類とする（吉田 2001）。これに従えばⅡ式a類は中期中頃までとなる。
- 8) しいて埋納土坑付近の住居址と関係があるとすれば後期中頃（福岡県教委 1994）。
- 9) 夜臼・三代地区遺跡群出土品のみ（新宮町教育委員会 1993）。
- 10) 屋山 洋氏（福岡市教育委員会）の御教示による。
- 11) 後藤（2000）で報告書に従い小銅鐸中型としたものは石製で中型と考えないほうがよい。また取瓶と考えたものは報告書どおり釦状品？の鑄型らしいと改めるが、鑄型の石材とはまったく異なり、鑄型かどうか疑問である。
- 12) 常松幹雄氏（福岡市教育委員会）の御教示による。
- 13) 以下、鑄型個数には当該種類・型式と推定される疑問符付きも含める。
- 14) 春日地域には細形ないし中細形a・b類とみられる矛鑄型がある（須玖坂本遺跡第4次調査8号鑄型A面）。
- 15) 劍型はなく、矛型が2個（佐賀地域の吉野ヶ里遺跡）、戈型が1個（佐賀地域の鍋島本村南遺跡）である。
- 16) この鑄型C面の細形Ⅰ式矛の湯口の形態は朝鮮半島の矛などの鑄型の湯口形態と同じで、日本列島

内には類例がなく、最も初期の型と考えてよい（後藤 2000）。

- 17) 雀居遺跡例は元部幅が4 cmで細形としてはもっとも広い部類で、生産初期のものではないだろう。
- 18) 厚さ3.0cmで細形銅剣片面鑄型の中では吉野ヶ里1号鑄型（中期中頃以後遺構埋土出土）の3.8cmに次ぐ。側面に長く溝を設ける細形鑄型はほかになく、矛鑄型では中広形b類と広形に、戈鑄型では中細形c類と広形b類鑄型に若干ある。
- 19) これをやや長手の細形銅剣鑄型と見る見解もある。（岩永 2000）
- 20) この岩石は関門層群脇野垂層群にみられるものでごく細粒の長石からなる（北九州市教育文化事業団 1998）。
- 21) この種の銅鐸は中国地方で出土するほか、近年吉野ヶ里遺跡でも1点出土し、伝出雲3号鐸と同範という（新聞報道による）。
- 22) 石材は蛇紋石滑石岩だが、近辺に同石材が採れるかどうかはわかっていない（唐木田氏の鑑定結果を池ノ上氏からご教示いただいた）。
- 23) 出土鑄型による製品は確認できていないが、佐賀県二塚山遺跡17号土壙墓（後期前半～中頃）副葬鏡はヒルハタ遺跡の鑄型に、大分県小園遺跡住居址（後期終末）出土鏡は須玖永田遺跡A地点第1次調査鑄型に酷似することが指摘されている（佐藤 1991, 春日市教育委員会 1987）。
- 24) 筑紫地域の不明品（小郡市内出土？）は長さ15cmの破片で武器ともとれる彫込みのへこみはあるが鑄型面を砥石にしている。流紋岩質火山岩製で、初期の鑄型とすれば鳥栖地域からの流伝ともみられる。注湯の痕跡はない。筑後地域（上枇杷）の不明品は異形品の裏面と側面の曖昧な型で黒く焼けている。
- 25) 第1期としてまちがいない滑石片岩製と出土遺構・層の時期が第1期（中期前半）の細形銅武器鑄型は剣7個、矛2個、戈1個である。時期が判断できる資料により細形製品量の生産各時期の割合を調べると、剣は第1期が64%、第1～2期が7%、第2期が25%、第3期前半期が4%、矛は第1期が64%、第2期が27%、中期としかわからないもの9%、戈は第1期が78%、第2期後半が17%、中期としかわからないものが5%で、いずれも3分の2以上が第1期である。  
 なお、製品量は地名表（九州歴史資料館 1980, 鳥根県教育委員会 1996）をもとに、その後の資料をくわえて算出した。
- 26) 矛の鑄型は細形より中細形が3倍近いにもかかわらず製品量は変わらなことから、矛では細形製品に占める朝鮮半島製品の割合が剣、戈より高かったかもしれない。
- 27) 細形銅武器を朝鮮半島製品と北部九州製品に弁別することは一部を除き困難である。戈にはすでに指摘したように明確な朝鮮半島製品を抽出できる。矛は節帯が複数突帯で構成されるⅠ式は佐賀地域で鑄型が出土しているが、朝鮮半島製品も含まれていよう。Ⅱ式も同様である。剣は一見して区別できるものはない。しかし個々の判別は困難でも伴出する青銅器をもとに以下のような推定はできよう。朝鮮半島製品である多鈕細文鏡をふくむ唐津地域、多鈕細文鏡と朝鮮半島製戈を含む早良地域、朝鮮半島製らしい戈を含む粕屋地域の細形銅武器には朝鮮半島製品が多いことが推定できる。また多鈕細文鏡や銅斧片の副葬がみられる佐賀地域の中期前半までの細形銅武器も同様であろうし、福岡地域の板付遺跡出土品も朝鮮半島製品の可能性は高い。
- 28) ほとんどすべての鑄型石材である石英長石斑岩の産地は佐賀県西部地域の可能性が最も高いという（唐木田 1993）。
- 29) 中細形a・b類剣の半数以上は中国、四国地域で出土して、北部九州製品のほかに瀬戸内東部製品が含まれる（兵庫県田能遺跡のa類剣鑄型（尼崎市教育委員会 1982））。
- 30) 筑豊地域でc類5本の一括埋納（糸田町古賀ノ峯）があり（新原 2000）、遠賀地域でb類2本が出ている。
- 31) 福岡地域では板付遺跡の矛5本が中広形か広形だろう。
- 32) 中広形か広形か明らかでないもの70本以上は計数からのぞく。
- 33) 唐泊海底発見のa類1本は糸島地域に属するか。

- 34) 数少ないI類(唐津市桜馬場, 対馬佐保ソウダイ)には鉤を立てるものもあって, 土型によるとみられ技術系譜・生産地は明らかでない。
- 35) 和歌山県堅田遺跡の鈍鑄型は前期末にさかのぼる(久貝 1999)。

<引用・参考文献>

- 尼崎市教育委員会 1982 田能遺跡発掘調査報告書, 尼崎市報告15
- 飯塚市教育委員会 1982 下ノ方遺跡, 飯塚市報告6
- 岩永省三 1980 弥生時代青銅器型式分類編年考. 九州考古学55
- 1982 須玖遺跡D地点出土細形銅武器の再検討. ミューゼウム373
- 1986 銅剣, 銅矛, 剣形祭器, 矛形祭器. 弥生文化の研究6
- 2000 青銅武器儀器化の比較研究—韓と倭—. 九州考古学会・嶺南考古学会編
- 江島伸彦 1999 福岡県田主丸町益生田寺徳遺跡出土の鑄型について. 九州考古学74
- 大野城市教育委員会 1983 仲島遺跡Ⅲ, 大野城市報告10
- 1988 森園遺跡Ⅰ, 大野城市報告26
- 1996 石勺遺跡, 大野城市報告47
- 岡崎 敬 1940 遠賀川上流の有紋弥生式遺跡地. 考古学雑誌29-2
- 緒方 泉 1994 広形銅矛・広形銅戈. 日永遺跡, 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書7
- 小郡市教育委員会 1990 大板井遺跡Ⅸ, 小郡市報告65
- 1993 津古遺跡群Ⅰ, 小郡市報告84
- 小沢佳憲 2000 弥生集落の動態と画期—福岡県春日丘陵を対象として—. 古文化談叢44
- 春日市教育委員会 1976 大南遺跡調査概報, 春日市報告4
- 1979 大谷遺跡, 春日市報告5
- 1980a 赤井手遺跡, 春日市報告6
- 1980b 須玖・岡本遺跡, 春日市報告7
- 1987 須玖永田遺跡, 春日市報告18
- 1988 須玖唐梨遺跡, 春日市報告19
- 1993 春日市埋蔵文化財年報1
- 1994a 須玖五反田遺跡, 春日市報告22
- 1994b 奴国の首都 須玖岡本遺跡, 吉川弘文館
- 1995a 須玖岡本遺跡, 春日市報告23
- 1995b 須玖五反田遺跡2, 春日市報告24
- 1995c 春日市埋蔵文化財年報2
- 1996 春日市埋蔵文化財年報3
- 1998 春日市埋蔵文化財年報5
- 2001 須玖盤石遺跡, 春日市報告29
- 春日市史編纂委員会 1995 春日市史上, 春日市
- 嘉穂町教育委員会 1987 嘉穂地区遺跡群Ⅳ, 嘉穂町報告7
- 唐木田芳文 1993 弥生時代青銅器の鑄型石材考. 蟻塔39-2
- 1997 北部九州で出土した弥生時代青銅器鑄型の石材. 九州史学会公開講演・研究発表要旨
- 北九州市教育文化事業団 1998 永犬丸遺跡群2, 北九州市報告216
- 1999 重留遺跡第2地点, 北九州市報告230
- 北九州市立考古博物館 1997 弥生の鑄物工房とその世界, 第15回特別展図録
- 木下尚子 1996 貝輪から銅釧へ. 南島貝文化の研究, 法政大学出版局

後 藤 直

- 九州大学春日原地区埋蔵文化財調査室 1994 九州大学埋蔵文化財調査報告第三冊
- 九州歴史資料館 1980 青銅の武器－日本金属文化の黎明－
- 京都大学文学部 1960 京都大学文学部博物館考古資料目録第1部
- 久貝 健 1999 御坊堅田遺跡市出土の青銅ヤリガンナの鑄型. 考古学ジャーナル449
- 高知県埋蔵文化財センター 2000 高知・南国市・田村遺跡群. 文化財発掘出土情報2000年9月号
- 神戸女子大学遺跡調査会 1992 西神ニュータウン内第65地点 (F地点) 遺跡現地説明会資料
- 児島隆人・藤田 等 1973 嘉穂地方史 先史編, 嘉穂地方史編纂委員会
- 後藤 直 1982 福岡市八田出土の銅剣鑄型. 福岡市立歴史資料館研究報告6
- ―― 1986a 馬鐸・小銅鐸. 弥生文化の研究6 道具と技術Ⅱ, 雄山閣
- ―― 1986b 巴形銅器. 弥生文化の研究6 道具と技術Ⅱ, 雄山閣
- ―― 2000 鑄型等の鑄造関係遺物による弥生時代青銅器の編年・系譜・技術に関する研究, 科学研究費補助金研究報告書
- ―― 2001 青銅器と鑄型－両筑平野－. 筑紫野市史 資料編 (上)
- ―― ・力武卓治 1990 高宮八幡宮所蔵鑄型の調査報告. 福岡市報告218 付編
- 佐賀県教育委員会 1980 柏崎遺跡群, 佐賀県報告53
- ―― 1993 平原遺跡Ⅰ, 佐賀県報告119
- ―― 1994 吉野ヶ里
- 佐賀市教育委員会 1991 鍋島本村南遺跡, 佐賀市報告35
- 佐藤正義 1991 ヒルハタ遺跡. 夜須町史
- 島田貞彦 1930 筑前須玖先史時代遺蹟の研究, 京都帝国大学文学部考古学研究報告11
- 島根県教育委員会 1996 出雲神庭荒神谷遺跡, 島根県古代文化センター
- 志摩町教育委員会 1983 御床松原遺跡, 志摩町報告3
- 下條信行 1977 考古学・粕屋平野. 福岡市立歴史資料館研究報告1
- ―― 1989 銅戈鑄型の変遷. 明治大学考古学博物館館報5
- ―― 1991 青銅器文化と北部九州. 新版古代の日本③, 角川書店
- 新宮町教育委員会 1993 夜臼・三代地区遺跡群 第1分冊, 新宮町報告6
- 新原正典 2000 糸田町古賀ノ峯出土銅戈の再検討. 九州歴史資料館研究論集25
- 添田町教育委員会 1994 庄原遺跡発掘調査概報
- 高倉洋彰 1990 弥生時代小形仿製鏡. 日本金属器出現期の研究, 学生社
- 高橋健自 1925 銅鉾銅剣の研究, 聚精堂
- 太宰府市教育委員会 1991 筑前国分尼寺跡Ⅲ, 太宰府市報告16
- 筑紫野市教育委員会 1993 隈・西小田遺跡群, 筑紫野市報告38
- 千代田町教育委員会 1985 姉遺跡, 千代田町報告3
- 常松幹雄 1998 伝福岡市八田出土の鑄型について. 福岡市博物館研究紀要8
- 徳本洋一 1999 福岡県大野城市瓦田出土の広形銅矛鑄型. 九州考古学74
- 鳥栖市教育委員会 1984 前田遺跡, 鳥栖市報告23
- ―― 1985 安永田遺跡, 鳥栖市報告25
- 中村 浩・池田栄史 1995 飯倉D遺跡, 福岡市報告440
- 那珂八幡古墳調査団 1978 那珂八幡古墳. 九州考古学53
- 中山平次郎 1927 須玖岡本の遺物. 考古学雑誌17-8
- ―― 1929 須玖岡本の鏡片研究. 考古学雑誌19-2
- 二丈町教育委員会 1994 曲り田周辺遺跡Ⅳ, 二丈町報告7
- 林田和人・原田範昭 1998 白藤遺跡群出土の矛形銅製品・鑄型について. 肥後考古学11
- 福岡県教育委員会 1973 福岡バイパス関係文化財調査報告.
- ―― 1979 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告11.

弥生時代の青銅器生産地—九州—

- 1982 浜山遺跡 B 地点, 福岡県報告62  
 --- 1988 上枇杷・金栗遺跡, 福岡県報告82  
 --- 1989 乙隈天道町遺跡, 福岡県報告86  
 --- 1994 日永遺跡Ⅱ, 浮羽バイパス関係報告7  
 --- 1995 仮塚南遺跡, 筑紫野バイパス関係報告3  
 福岡市教育委員会 1975 板付, 福岡市報告35  
 --- 1981 板付, 福岡市報告73  
 --- 1982 西新町遺跡, 福岡市報告79  
 --- 1986 有田遺跡群, 福岡市報告129  
 --- 1987a 那珂遺跡, 福岡市報告153  
 --- 1987b 有田・小田部8, 福岡市報告155  
 --- 1987c 福岡市の文化財  
 --- 1988 有田・小田部9, 福岡市報告173  
 --- 1990 公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ, 福岡市報告219  
 --- 1992a 比恵遺跡群(11), 福岡市報告289  
 --- 1992b 那珂遺跡4, 福岡市報告290  
 --- 1993a 那珂遺跡8, 福岡市報告324  
 --- 1993b 拾六町平田遺跡2, 福岡市報告349  
 --- 1994 比恵遺跡13, 福岡市報告368  
 --- 1995 雀居遺跡2, 福岡市報告406  
 --- 1996a 比恵遺跡群(20), 福岡市報告451  
 --- 1996b 比恵遺跡群(22), 福岡市報告453  
 --- 1997a 有田・小田部28, 福岡市報告513  
 --- 1997b 井尻B遺跡5, 福岡市報告529  
 --- 1997c 比恵遺跡群(24), 福岡市報告530  
 --- 2000a 雀居9次, 福岡市報告635  
 --- 2000b 井尻B11次, 福岡市報告644  
 文化財保護委員会 1959 埋蔵文化財要覧2  
 松本憲明 1966 福岡県夜須町出土の銅戈鎔范. 考古学雑誌52-2  
 水野精一(編) 1953 対馬, 東方考古学叢刊乙種6, 東亜考古学会  
 宮井善朗 1987 銅剣の流入と波及. 東アジアの考古と歴史 中, 同朋舎出版  
 向田雅彦 1993 鳥栖市出土の青銅器鋳型類. 考古学ジャーナル359  
 --- 1996 鳥栖市本行遺跡の矛形祭器の埋納遺構. 考古学ジャーナル406  
 森貞次郎 1942 古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義. 古代文化13-7  
 --- 1963 福岡県香椎出土の銅釧鎔范を中心として. 考古学集刊2-1  
 --- 乙益重隆・渡辺正気 1958 福岡県志賀島発見の細形銅剣鎔范. 九州考古学3-4  
 森本六爾 1932 広鋒銅鋳鎔范. 考古学2-1  
 八木契三郎 1908 両筑の遺物遺蹟. 國學院雑誌14-7  
 夜須町教育委員会 1999 宮ノ上遺跡, 夜須町報告44  
 柳田康雄 1980 青銅製鋤先. 鏡山猛先生古稀記念古文化論攷  
 大和町教育委員会 1986 惣座遺跡, 大和町報告3  
 山野洋一 1979 筑紫野市永岡出土銅戈鋳型. 地域相研究7  
 吉田 広 1993 銅剣生産の展開. 史林76-6  
 --- 2001 弥生時代の武器形青銅器, 科学研究費補助金研究報告  
 力武卓治 1982 席田遺跡群赤穂ノ浦遺跡出土の銅鐸鋳型について. 考古学ジャーナル210